

# 武蔵野台地東辺における 縄文時代中期の集落景観

Colony Landscape on the Eastern Margin of the Musashino Daichi  
in the Middle Jomon Period

宇佐美哲也

USAMI Tetsuya

はじめに

- ①武蔵野台地東辺における縄文時代中期遺跡の分布
- ②主要中期集落遺跡における集落景観の検討
- ③住居施設の変遷から見た集落の変遷
- ④大規模集落遺跡と小規模集落遺跡

まとめ

## 【論文要旨】

武蔵野台地東辺における縄文時代中期の主要集落遺跡について、土器の細別時期ごとに住居分布を検討した。その結果、いずれの集落遺跡においても、一時的に住居軒数が増加し、住居が環状に分布するような景観を呈する時期が認められるものの、基本的には1～数軒の住居が点在するような一時的景観を基本として、住居数の増減を繰り返したり、途中断絶を挟みつつ、変遷していることが確認できた。大規模集落跡、環状集落跡とされる集落遺跡も、住居が環状に分布するような景観が途切れなく継続する姿は復元できない。また、住居数が増加する時期は、各集落遺跡により違いがあることから、その要因は、各集落遺跡、各地域ごとに異なる可能性が高いと想定した。

あわせて、周溝、支柱穴、炉など住居施設の変遷を検討した結果、ひとつの集落遺跡が、最初から最後までひとつの集団により計画的、継続的に営まれたと考える材料は得られず、むしろ各時期とも多様な住居形態が混在する様相が明らかであることから、ひとつの集落遺跡も、時期ごとに拡大・縮小を繰り返していたであろう異なる集団の領域が、相互に複雑に重複することで形成された可能性が考えられる。

したがって、大規模集落跡と小規模集落跡の差は、集落の質的な差ではなく、その場所が居住地として利用される頻度の差を示しているものであり、時期ごと、遺跡ごとに異なる利用頻度の差が何に起因するのかを解明することこそが、各時期における居住地の選択や、環境、生業等を解明する手掛かりになるものと考えられる。その意味では、定住か移動かといったこれまでの集落論にみられるような二項対立的な議論のみに立脚して集落遺跡を検討するのではなく、一定地域における定着のあり方とその実態を、個別の集落遺跡の検討を通じて明らかにしていく視点が求められる。そのため、各集落遺跡における一時的景観の復元と平行して、出土土器の様相、住居形態など様々な考古学的要素をあわせて検討することにより、各時期・各地域における定着の範囲とその内容を解明していく努力が求められる。

【キーワード】 縄文時代中期、武蔵野台地東辺、集落、一時的景観、断絶性、定着

## はじめに一問題の所在

1980年代、縄文時代の集落研究は停滞していると認識されていた。それは掘り上がった集落跡の全体図、遺構分布図に分割線を引くことでムラの構造の解明を試みたり、環状集落跡が環状であることにこそ何らかの意義を見いだそうとしてきた従来からの集落研究の行き詰まりを意味していた。まさに、居住の当初から環状構造が意識されつつ、環状の集落構造が長期間、継続的に維持されたものであることを自明の前提としてきた集落研究の限界が露呈した状況であった。

そのようななか、1984年に開催された日本考古学協会山梨大会におけるシンポジウム『縄文時代集落の変遷』における問題提起[土井・新藤1984]と、それに基づき改めて提起された土井義夫「縄文時代集落論の原則的問題—集落遺跡の二つのあり方をめぐって—」[土井1985]は、集落研究における新たな視点を提示することとなった。その根幹は、考古資料の資料論の原則を踏まえれば、大規模集落跡あるいは環状集落跡は長い時間の累積の結果形成されたものであり、一時点における集落景観は、小規模集落跡の景観と大差ないのではないかとするものであった。

土井の問題提起を受けて、集落研究における厳密な時間認識の必要性が確認され、複雑に累積した居住痕跡群について、累積の過程を詳細に復元していくことこそが、集落研究における当面の課題となった。その後、集落研究における新たな問題意識の継承は、林謙作により、従来までの集落研究、すなわち「縦切りの集落研究」とは一線を画するものとして、「横切り集落論」と呼称されてきた[林2004]ことは周知のことであろう。

1995年には、『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平』[縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会1995、記録集は、宇津木台地区考古学研究会2008]が開催され、「横切りの集落研究」における具体的な視点と検討手法が明らかにされるに至った。シンポジウムでは、中期集落の具体的な検討に備えた土器の時期細別が整備されるとともに、考古資料の原則的な資料論を踏まえうえて、掘り上がった遺構全体図、すなわち最終的な結果として残された集落跡の姿から居住のあり方を検討するのではなく、土器の細別時期ごとに住居分布図を作成し、細別時期ごとの居住の実態を明らかにしたうえで、その変遷、累積の経過を追っていく作業こそが、環状集落跡の形成過程を解明するために必要だという姿勢が堅持された。

具体的には、遺構内における遺物出土状態の記録化によって廃絶後の住居堅穴の様相を明らかにしたり、遺構間における遺物接合関係の検討から、同時に機能した、あるいは廃絶時期に近い住居を同定したり、逆に同時に機能したはずのない住居を絞り込むなど、詳細な調査記録に基づく検討手法が提示された。また、住居跡のライフサイクルの復元とそれらの集落遺跡内における相互関係の検討など、集落跡における一時的景観の復元を目指す様々な手法が積極的に検討された。その後、細別された時間軸にAMS<sup>14</sup>C年代測定値が付与されるに至り、同時期存在住居の同定のみならず、住居覆土の形成過程の多様性と形成にかかわる時間幅さえ検討が可能な状況に至っている。これらの検討を通じて明らかになってきたことなかで特に重要なことは、土器の細別時期が有する時間幅に比較して、住居の構築、居住から廃絶に関わる時間幅の方が圧倒的に短い事例が確認されてきたことであろう。集落遺跡における一時的景観を復元するためには、土器の細別時期だけでは不十

分であり、途中で居住の断絶があった場合でも、土器の細別時期のみによって集落の変遷を追う限り、その断絶が把握できない可能性も明らかになった。これまで「横切りの集落研究」の立場から提示されてきた、調査事実、状況証拠による検討事例の積み重ねは、住居の機能・耐用期間と土器の細別時期との相互関係、集落における居住の継続性など、従来の集落研究において常識とされてきた前提が、必ずしも集落研究における自明の前提とはならないことを明らかにしてきた。

その結果、細部では微妙に見解が異なるものの、少なくとも、掘り上がった集落跡がそのまま一時的な居住景観を示すものではないこと、環状集落跡は時間的な累積の結果として残されたものであるということは、研究者間で共通の認識となってきたといえる。

また、土井の問題提起は、それまで集落研究のなかで正面から取り上げられることが少なかった時期の居住のあり方に焦点をあてることにもなった。具体的には、多摩丘陵における前期前葉の事例検討 [土井・黒尾 1992]、群馬県域における前期後葉の事例検討 [木村 1992]、多摩丘陵における前期末葉の事例検討 [洪江・黒尾 1987]、南西関東から中部地方における中期初頭の居住形態の検討 [金子 1991] などがある。これら具体的な検討が進むにつれ、これまで拠点的で継続的に居住活動が営まれたとされてきた大規模集落、環状集落は、縄文時代を通じて決して一般的な存在ではないことが明らかにされてきた。むしろ、縄文時代を通じて普遍的な存在であるのは、小規模集落と評価されてきたようなあり方であり、「単期的な居住の場」が残される時期のほうが、縄文時代を通じて普遍的であることが明らかにされてきた。集落研究において縄文時代の典型的な集落の姿として主に検討されてきた「重層的な居住の場」は、縄文時代を通じてみた場合、その存在が確認できる地域・時期のほうが圧倒的に少ないのである。

何らかの意義を見出そうとしてきた「環状集落」も「重層的な居住の場」としての最終形態であり、その一時的景観は「単期的な居住の場」と大差ない、さらに「重層的な居住の場」が残される地域・時期は限定されるということになれば、「大規模」—「小規模」、「拠点」—「派生」という概念のなかに環状集落跡の意義を見出そうとしてきた集落研究、さらには領域研究のあり方までも再検討が求められることは必至であった [土井・黒尾ほか 2004]。

1985年以降の集落研究における到達点を踏まえれば、縄文時代の集落研究を深化させるためには、まずはもっとも普遍的なあり方である「単期的な居住の場」における居住様相の解明を積み上げていくことが求められているといえる。その一方で、「単期的な居住の場」が残されることが一般的な縄文時代史のなかに、環状集落跡をいかに位置づけていくのかといった課題に応えるためには、「単期的な居住の場」がどのような要因、過程を経て「重層的な居住の場」として残されるに至るのか、環状集落跡が形成された時間的累積の過程をいかに紐解いていくのか、具体的な事例に即して検討を積み重ねていくことが必要なのであろう。

そこで本稿では、あらためて「横切りの集落研究」の視点から、武蔵野台地東辺における縄文時代中期の集落遺跡を対象に、集落の一時的景観とその変遷を検討していくこととした<sup>(1)</sup>。今回は既存報告書を対象として検討を行ったため、これまで提示されてきたような詳細な検討を行うためには資料的な限界があった。そこでまずは各集落遺跡について、土器の細別時期に則った住居分布の変遷を検討した。その後、集落遺跡の検討視点のひとつとして住居の形態に着目した検討を行った。

## ①……………武蔵野台地東辺における縄文中期遺跡の分布

### (1) 検討対象地域の設定

武蔵野台地東辺とは、東京都区部とその西側に隣接する西郊地域を指す。当該地域では比較的古い時期から発掘調査が行われ、土器の編年研究上貴重な素材を提供するなど古くから著名な遺跡が存在する。その一方で、過去の調査について詳細な調査報告が公刊されていない遺跡が多いためか、集落研究の素材として取り上げられる遺跡は少ない。武蔵野台地東辺は、武蔵野・多摩地域に比べて、集落研究という側面では後進的な地域とも言える。都市化の進展が早く、古くから住宅地が広がる同地域では、三多摩及び多摩丘陵における造成開発の事前調査のように、一度に集落遺跡の全容が明らかにされるような調査事例が少ないこともその要因なのであろう。それでも地道な事前調査の積み重ねにより、虫食い状ではあるが、集落の全体像をкаろうじて垣間見ることができるよう集落遺跡も増えてきた。さらに、渋谷区鶯谷遺跡や世田谷区桜木遺跡など、古くから宅地化・都市化が進んだためにこれまで調査の機会がなかった場所が近年まとまって再開発されることにより、これまで想定されていなかったような集落遺跡の存在が明らかとなる事例も出てきている。

以上のような資料的な制約はあるものの、武蔵野台地東辺地域は、その位置関係から、武蔵野・多摩地域と下総方面、さらには下末吉台地との地域差あるいは関係性等を検討するうえでも重要な地域と考えられることから、今回改めて検討の対象地域とした。

### (2) 武蔵野台地東辺の地形と遺跡分布

武蔵野台地は、東京都青梅市付近を西端として東側に向けて扇状に広がる東西約50km、南北約40kmに及ぶ広大な洪積台地であり、北側を荒川とその支流である入間川に、南側を多摩川により画されている。形成時期の異なる複数の段丘面により形成されており、古い順に、下末吉面、武蔵野面、立川面と続く。扇頂から広がる台地の大部分は武蔵野面に該当し、多摩川流域及び荒川流域には帯状に立川面が連なる。武蔵野台地東辺では、成増台、本郷台、豊島台及び目黒台、久ヶ原台が武蔵野面に相当し、淀橋台と荏原台が下末吉面に相当する形成時期の古い段丘面である。

武蔵野台地東辺は、白子川、石神井川、谷田川、谷端川、妙正寺川、善福寺川、神田川、渋谷川、目黒川、九品仏川、蛇崩川、北沢川、烏山川、立会川、仙川、野川といった台地内部の湧水点を水源とする中小河川が数多く東流し、台地上面が複雑に下刻されている。とくに下末吉面にあたる淀橋台、荏原台などは、深く刻まれた小支谷が樹枝状に入り組み、起伏に富んだ地形を呈している。台地内部の湧水点とそこから流下する河川が少ない武蔵野地域に比較して、過去の土地利用痕跡が数多く残されていたとしても不思議はない。

### (3) 主要中期集落遺跡の分布

武蔵野台地上における縄文中期の集落遺跡は数多く知られており、その多くが多摩川、荒川といった大河川を望む台地縁辺や台地内部を刻む中・小河川の流域に分布する。武蔵野台地の西寄り

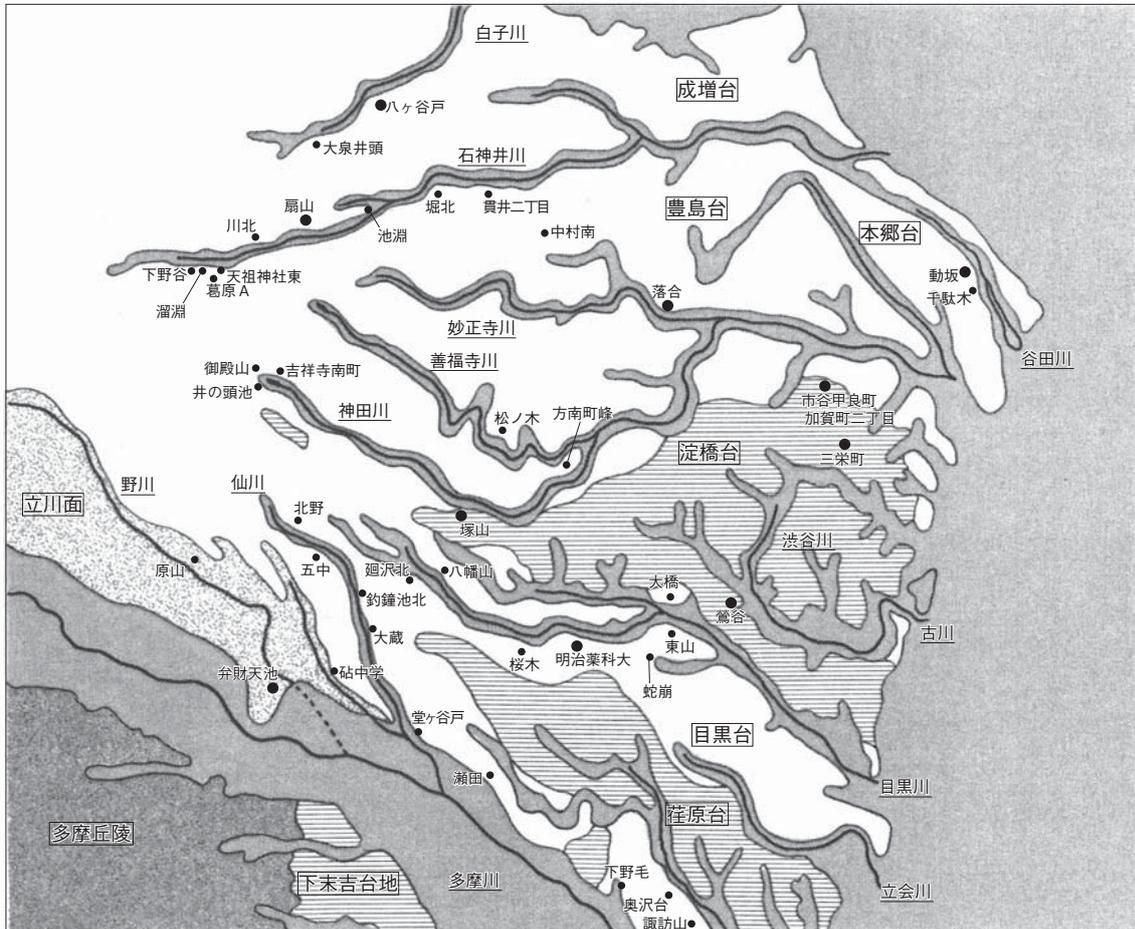


図1 武蔵野台地東辺における縄文中期の主要遺跡分布

では多摩川中流域左岸の河岸段丘上に1.5～2kmおきに中期集落が点在する[中山2004]。対して、武蔵野台地東辺は、台地内部の湧水点を水源とする中小河川によって樹枝状に開析された複雑な地形を呈するため、台地内部に位置する遺跡が多いが、基本的には各中小河川を望む台地上に一定の距離をおいて点在しており、分布密度で見れば、西寄りの地域に比較してやや高い。

都内に限ってみても、白子川沿いには、大泉井頭遺跡、八ヶ谷戸遺跡が、石神井川沿いでは上流に下野谷遺跡及び富士見池遺跡群(溜淵、天祖神社東、葛原A)が広がり、下流に向けて扇山、池淵、堀北、貫井二丁目、中村橋といった各遺跡が点在する。本来、石神井川と一連の河川であったと考えられる谷田川沿いには、その西岸、本郷台上に動坂遺跡、千駄木遺跡などが位置する。

妙正寺川では、上流域には中期の遺跡は少ないが、中流域北岸の豊島台上に落合遺跡が位置する。神田川の水源地である井の頭池周辺には井の頭池遺跡群(井の頭池、御殿山、吉祥寺南町)が広がり、やや下流には北岸に高井戸東、南岸に塚山遺跡が位置する。また、善福寺川沿いには、松ノ木、西田小学校、方南町峰遺跡群等が分布する。神田川は善福寺川、妙正寺川と合流後、淀橋台の北縁を東流するが、その南岸、淀橋台上には市谷甲良町・加賀町二丁目遺跡などが立地するのに対して、豊島台にあたる北岸には遺跡が認められない。神田川から南西へ延びる現江戸城外堀の谷筋からさ

らに西へ延びる小支谷である紅葉川沿いには三栄町遺跡が位置する。渋谷川の中流域には、近年明らかになった大規模集落遺跡のひとつである鶯谷遺跡が位置するとともに、目黒区域を流れる目黒川流域には大橋、東山、目黒不動など、これまで調査が積み重ねられてきた遺跡が多く分布する。

世田谷区域では、烏山川沿いに廻沢北、八幡山、桜木、騎兵山の各遺跡が、蛇崩川沿いに蛇崩、明治薬科大学の各遺跡が、九品仏川沿いには奥沢台、諏訪山の各遺跡が位置する。仙川流域では上流の三鷹市域に北野、三鷹市立第五中学校が、中流域から下流域にあたる世田谷区域には釣鐘池北、大蔵の各遺跡が存在する。多摩川北岸には、堂ヶ谷戸、瀬田、下野毛遺跡の各遺跡が一定の距離をおいて点在しており、これまでに各遺跡で数次～数十次に及ぶ調査が蓄積されてきている。

さらに、野川流域には、三鷹市域では野川公園、ICU構内、坂上、出水、天文台構内の各遺跡が、調布市域に入ると原山遺跡が、狛江市には弁財天池遺跡というように、実に数多くの中期集落遺跡が点在する状況である。

## ②……………主要中期集落遺跡における集落景観の検討

### (1) 対象遺跡の選択

前述したとおり、武蔵野台地東辺には数多くの中期集落遺跡の存在が知られているが、本稿では、そのうち10遺跡を取り上げ、集落景観の変遷について検討を行った。対象遺跡は、主要河川各流域から選択するよう心掛けたが、調査成果の多くが公開され、全容の把握が比較的容易な遺跡を検討対象に選択したため、必ずしも各河川流域で最も著名かつ典型的な集落遺跡を選択してきたわけではない。検討対象とした遺跡は、北側から白子川流域の八ヶ谷戸遺跡、石神井川流域の扇山遺跡、石神井川の下流域にあたる谷田川沿いの動坂遺跡、妙正寺川流域の落合遺跡、神田川上流域の塚山遺跡、神田川中流域の市谷甲良町・市谷加賀町二丁目遺跡、旧平川の支流紅葉川の流域に位置する三栄町遺跡、渋谷川流域の鶯谷遺跡、目黒川の支流である蛇崩川流域の明治薬科大学遺跡、野川流域の弁財天池遺跡の10遺跡である<sup>(2)</sup>。

### (2) 検討の視点と方法

本稿では、各遺跡における検討の詳細を記す余裕がないため、検討の結果のみを記述していくが、その前段として、検討の視点と方法について確認しておく。といっても、特段、目新しい検討手法を取り入れたわけではない。基本的には、土器の時期細別区分に沿って、既刊の報告書を検討したものである。その意味では、前述した『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平』において提示された中山真治による「縄文中期土器の時期細分と集落景観」[中山1995]と同様の視点・方法に立脚し、検討の対象をやや東の地域にシフトしたものと言える。

住居の時期認定における時間軸は、現段階で最も細かい時間的な目盛りであり、集落研究に必要な時間軸[黒尾2001]として最も有効である「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」[黒尾・小林・中山1995、小林・中山・黒尾2004]に準拠した。これは中期前葉の五領ヶ台式期から、中葉の勝坂式期、後葉の加曾利E式期までの期間を「13期31細別」したものである。

縄文時代中期の時間幅を約 1,000 年と仮定した場合、1 細別段階は約 30 年前後ということであったが、AMS 年代測定における年代値が付与されることによって、時期細別の 1 段階は、いずれも均等な時間幅を持つものではなく、短い段階で約 20 年、長い段階では 80 年というように、継続時間に大きな差が認められることもすでに確認されている [小林 2004a]。

各遺跡における事例検討では、明らかな重複住居、または部分的に重複した住居が 1 軒の住居として報告されている場合、まずこれを分離し、それぞれ別の住居とした。また、1 軒の住居においても、炉、埋甕、柱穴などの重複関係から、複数回の改築・改修が想定できる事例が多くある。この場合、1 基の竪穴を利用し複数回の住居が営まれたと判断し、住居として利用された回数を「住居回数<sup>(3)</sup>」としてカウント、各回における住居の形態を把握した。これは小林謙一の「生活面」[小林 2009] の把握とほぼ同義である。例えば、1 軒の竪穴住居において、炉が 3 基検出されれば、住居回数は 3 回、支柱穴がそれぞれ 2 基ずつ重複して検出されたり、内側と外側を巡るように 2 重の柱穴が検出された場合は、住居回数は 2 回となる。周溝が複数検出される場合も同様で、基本的にはこれらの組み合わせを総合して住居回数を判断した。ただし、新期の炉の構築により古期の炉が片付けられたり、破壊されたりするなど、古い「生活面」は新しい「生活面」の構築により破壊され、正確な形態が復元できない場合が多い。また、本来埋甕炉であったと想定される古い「生活面」の炉体土器が、新期の「生活面」の構築に伴い抜かれた事例など、古い段階の「生活面」については、構築時期、機能時期に関する情報が極端に少なく時期比定が困難なものが多い。そのため、「生活面」の更新、すなわち住居の改修・改築が、連続的な居住を示す痕跡であるのか、あいだに居住の断絶を介在するものであるのか議論が分かれることにもなっている [宇津木台地区考古学研究会 2008]。

1 軒の竪穴住居において複数の「生活面」が確認され、これらが改修、改築の痕跡であると想定されると、一般的には各生活面の構築時期はそれほどかけ離れたものとは考えられにくい。複数の炉体土器、埋甕等が残された住居では、それぞれの所産時期が大きくかけ離れる事例が多くないことから、生活面の更新は、同一細別段階内か前後する細別段階ほどの時間幅のなかで行われたものであろうと想定できる<sup>(4)</sup>。

その一方で、生活面に対応する支柱穴配置の変遷を整理すると、大きく分けて 3 つのあり方に整理できる。場所をほぼ変えずに同じ支柱穴配列で建替えられるもの (a 種)、柱間をやや大きくし、同じ支柱穴配列で建替えられるもの (b 種)、4 本支柱穴から 5 本支柱穴へ変更するなど、柱穴の位置を大きく変え、支柱穴配列も変化させるもの (c 種)、である。a 種は竪穴の拡張を伴わない上屋の建替えが想定される。b 種は基本的にこれまで「拡張」と捉えられてきたものに相当するが、同一の居住者による連続した居住にともなう住居の拡張であるのか、竪穴が一旦廃絶された後、異なる居住者により廃絶竪穴の一部が再利用された痕跡なのかは一概には判断できない。c 種は建替え、拡張というよりも、どちらかといえば「重複」に近いもので、同一の居住者による連続的な居住の痕跡とは考え難いものと整理できる [宇佐美 2006]。

複数の住居回数が認められる住居に関しては、各生活面相互の時間関係、とくに連続的な居住の痕跡なのか、あいだに断絶を挟む痕跡なのかによって、1 軒の竪穴住居に含まれる情報に差が生じるが、この点については、古段階の生活面に残された炉体土器や埋甕の同一個体破片の分布・接合

状況など、状況証拠を積み上げたうえで個別に検討すべき課題であり〔黒尾1995b・2008bなど〕、各住居についてライフサイクルごとに分解し、その変遷を押さえる作業〔小林1995・2008・2009など〕を経ない限り、具体的な検証は不可能である。既存報告書の内容のみでは検討はほぼ不可能であることから、本稿ではこの点に関しては検討していない。

以上のような点を踏まえたうえで、各住居、「生活面」について、住居の形態、遺物の出土状況、重複関係、所産時期等を整理した<sup>(5)</sup>。各住居、「生活面」の所産時期の認定は、住居として機能していた時期を把握するよう努めた。具体的には、住居施設に転用された炉体土器、埋甕など、その住居の構築・機能時期を示すような土器により廃絶時期の上限を押さえたうえで、床面直上、覆土下層から出土した土器により廃絶時期の下限を押さえていくことで、機能時期を推定している。炉体土器、埋甕など住居の構築・機能時期の上限を示すような遺物が出土していない場合には、床面直上出土の土器、それもない場合には、覆土下層出土の土器で所産時期を判断した住居もある。報告書の記述や図面から遺物の出土状態が判断できない場合には、覆土出土土器のなかから明らかに後世の混入と考えられる遺物を除き、出土土器の時間幅から、廃絶時期を想定した事例もある。

また、竪穴覆土上層に極端に時期がかけ離れた新しい時期の遺物が集中する場合、検出された住居に別の遺構が重複したものとして、別遺構の存在を想定した。その別遺構が住居である可能性が高い場合、かけ離れた異なる時期の分布図に同一住居が2度表示される場合がある。さらに、屋外炉、屋外埋甕、集石と報告された遺構であっても、周囲に柱穴が存在する場合や、竪穴覆土の存在を示すような遺物の出土状態が報告されている場合など、状況証拠から見て住居施設の一部である可能性が高いものについては1軒の住居として扱った。

住居の形態については、「住居跡分類コード」〔小葉1995a〕に基づき整理した。小葉による「住居分類コード」は、壁溝（周溝）の有無、主柱穴数、炉跡の形状を記号化し組み合わせたものである。本稿では、これに、炉形態のひとつとして、集石炉（Su）を追加した。各遺跡における検討手法の詳細については、狛江市弁財天池遺跡を対象とした旧稿〔宇佐美2006〕や日野市七ツ塚遺跡を対象とした検討〔宇佐美・黒尾2005〕などを参照されたい。また、主に中期後葉加曽利E3式期以降の屋外炉、屋外埋甕などを1軒の住居跡として認定する際の視点、検討手法などについては、仮称「加曽利E3」面想定住居について触れた旧稿〔宇佐美1998a, 1998b〕を参照されたい。

なお、各事例検討のなかで、集落遺跡における住居分布を説明する際、便宜上、「環状分布」という用語を使用している。これは、細別段階ごとの住居分布状況を説明する際、累積の結果として最終的に住居跡群が環状に残されたなかの、どの位置に住居が分布するのか、相対的な位置関係を説明するため便宜的に使用しているに過ぎないものであることをあらかじめお断りしておく。

### (3) 土器の細別時期に基づく住居分布と変遷の検討

#### ① 練馬区八ヶ谷戸遺跡（第2・3図）

練馬区八ヶ谷戸遺跡は、練馬区大泉二丁目に所在し、板橋区成増方面に向けて北東流する白子川の右岸に形成された舌状台地上に広がる。これまでの調査において住居40軒、屋外埋甕30基、屋外炉14基、集石遺構4基、土坑66基等が調査されており、集落跡の約1/2強程度が調査されてきたものと考えられる。1次調査区の東西両側、2次調査区の南東側、3次調査区の南側などでは、

未調査範囲に住居が遺存する可能性が高い。なお、屋外埋甕、屋外炉と報告された遺構のなかには、本来住居の一部であった可能性の高いものが10軒含まれており、今回の検討ではこれらも住居として扱った。また、屋外埋甕、土坑のうち、墓坑の可能性が高いと考えられ、所産時期が推定可能な遺構についても、あわせて変遷図に記載した。

八ヶ谷戸遺跡の地に住居が営まれるようになるのは7b期で、3次調査区の西寄りに1軒の住居が営まれる。出土遺物が少なく遺存状態も良くないため詳細な検討はできないものの、8期及び9b期に営まれた住居によって重複を受けた2次22号住居跡も7b期の所産である可能性が高い。とすれば、八ヶ谷戸遺跡においてはじめて住居が営まれた際の景観は、1軒の住居が営まれる姿、あるいは西側と南側に1軒ずつの住居が80mほどの距離をおいて点在するような景観であったと想定できる。

8期には西側に1軒、南側に2軒、9b期には西側、南側に各1軒ずつというように、7b期と同様の住居分布を示している。西側に1軒の住居が分布する10a期もほぼ同じ様相なのであろう。南北に1軒ずつの住居が分布する10b期についても、住居間は約80mほどの間隔が保たれている。その後、10c期には西側に1軒、南側に2軒の住居が、11a期には西側に1軒の住居が分布する。11b期にはこれまで住居が確認できなかった東側に1軒の住居が分布する。

以上11b期までの集落景観は、未調査範囲に住居が分布する可能性を考慮しても、約80mほどの距離をおいた場所に、それぞれ1・2軒ずつの住居が点在するといった景観で変遷したものと想定されよう。そのあいだ、住居が営まれる場所は時期により微妙に異なるとともに、8b期、9c期に位置づけられる住居が確認できていないことなどから、この場所が常に居住の場として利用され続けたわけではなく、途中居住が断絶する時期が介在したのであろう。

11c1期には西側に3軒、東側に1軒、11c2期には東側に1軒、西側に3軒、さらに北側に1軒の住居が分布する。周囲の未調査範囲にも住居が存在する可能性を考慮すると、11b期以前に比較して、一時期の住居数はやや増加するのであろう。しかし11c1期の52号遺構を除き、両時期とも東西に分布する住居の間は約80mほどの間隔が保たれている。以上のように、11c1・11c2期にはやや軒数が増えるものの、7b期から11c2期にかけては、各時期とも、80mほどの距離をおいて1～2軒程度の住居が分布する景観が基本で、その住居分布が時期ごとに微妙に場所をずらしつつ重複を重ねることで、結果として住居跡の環状分布が形成されてきた様相が確認できるのである。

一方、12a期以降は、それまでの分布傾向が一気に崩れ、一時期の住居軒数が増加するとともに、11期以前のように一定の距離をおいて住居が対峙するような分布状況ではなくなり、12a期では2次調査区に南北に連なるように、12b期には東西でさらに住居軒数が増加する。ただし12b期の住居は複雑に重複して検出される場合が多く、実際に同時期に機能していた住居数は、分布図に示された住居数よりも少なくなるはずである。例えば、2次調査区6号住居跡周辺では、3軒の住居が重複しており、12b期には住居の構築→機能→廃絶→埋没までが3回重複するほどの時間幅がある。

集落景観の変遷を追ってみると、7b～11b期、11c1・11c2期、12a期、12b期以降と大きく4つの段階に分解することができる。しばしば指摘される住居分布の「内進化現象」[土井・黒尾2004など]については、12a期以降、とくに12b期において顕著となるが、本遺跡では12c期を最後に住居は営まれなくなる。このように、八ヶ谷戸遺跡が同一集団による継続的な居住の結果残さ

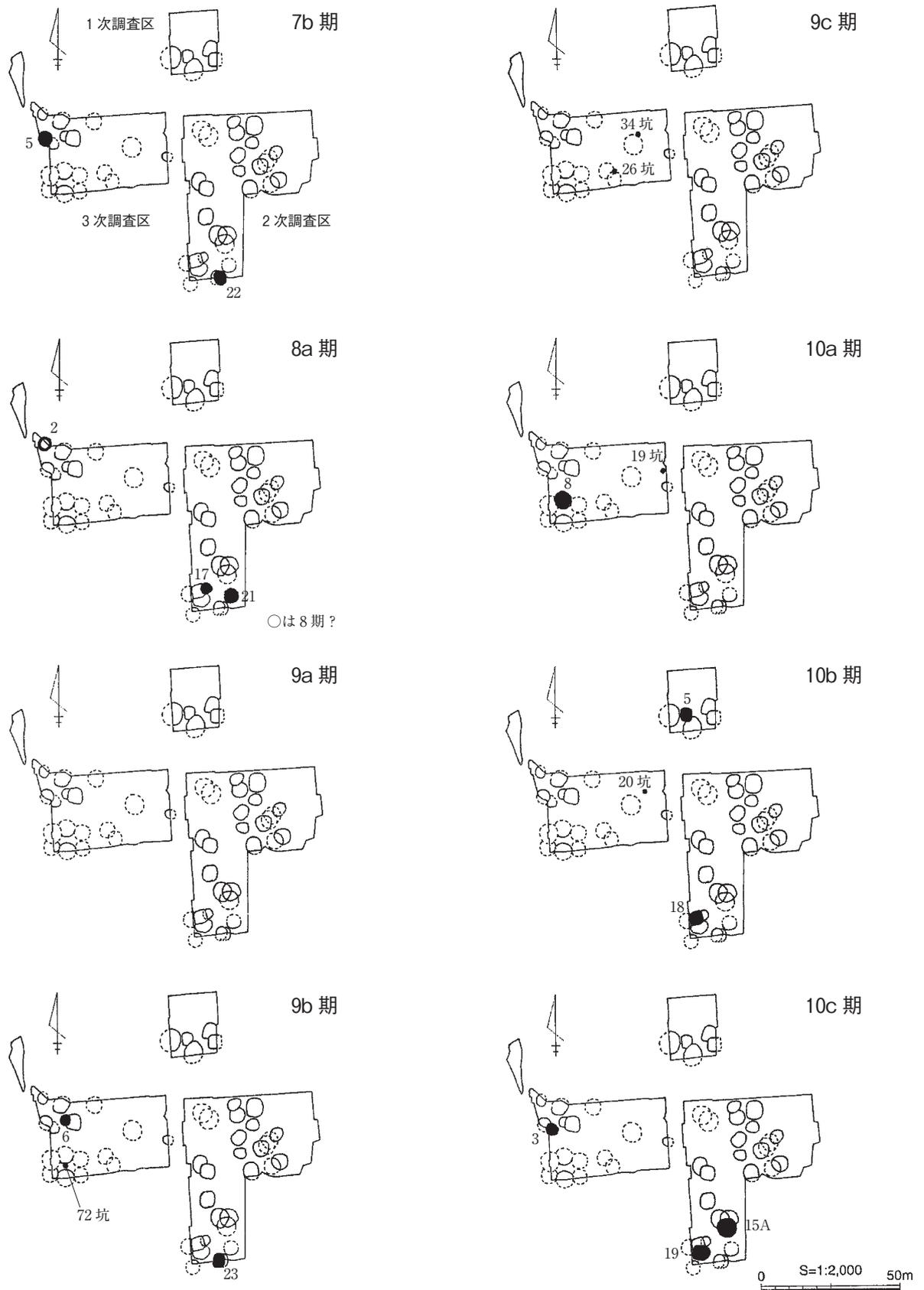


図2 ハヶ谷戸遺跡における時期別住居分布図(1) (S=1/2,000)

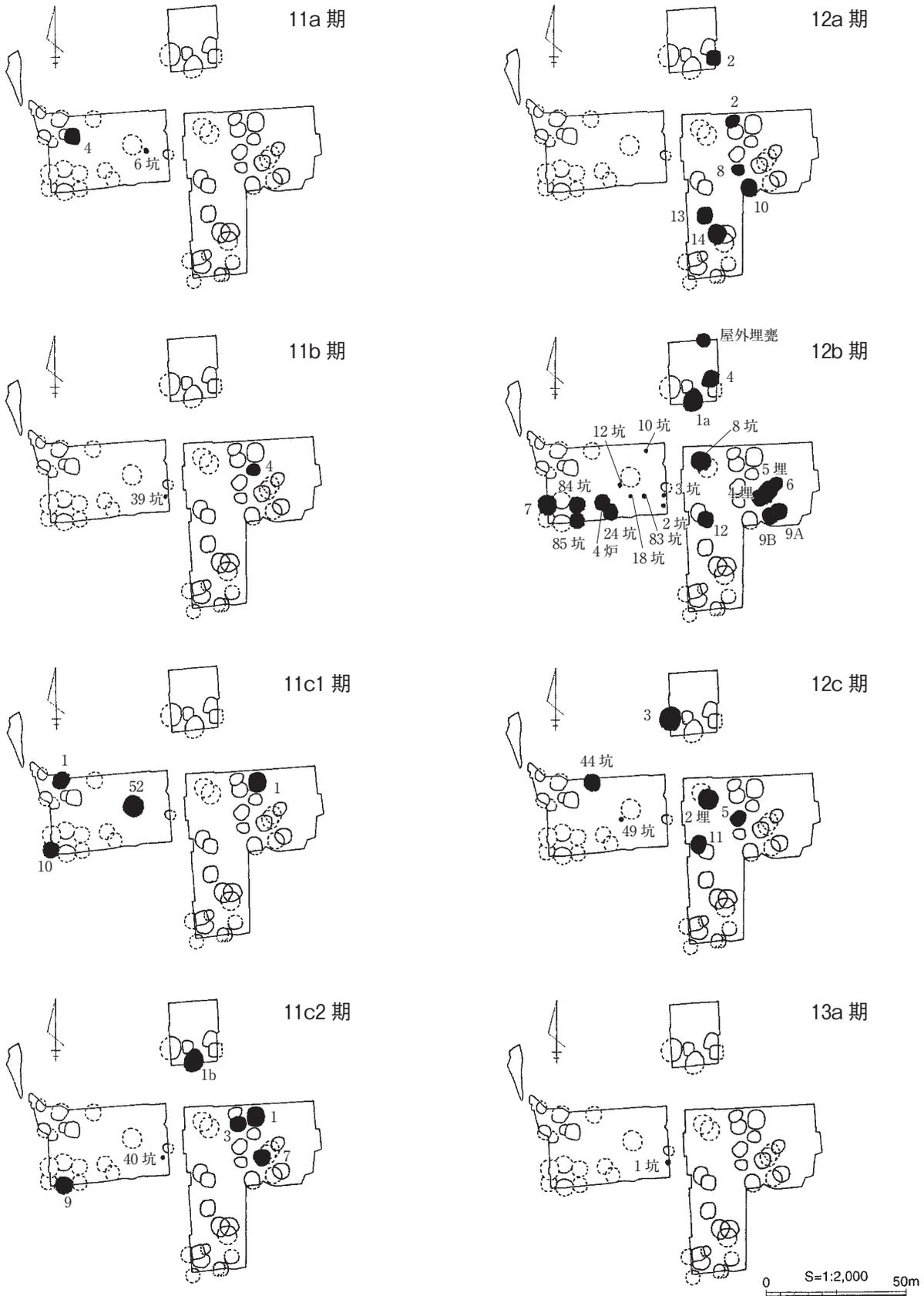


図3 八ヶ谷戸遺跡における時期別住居分布図(2) (S=1/2,000)

れたものとする考え方には無理がありそうで、最終的な環状集落跡の姿は、少なくとも住居分布のあり方が大きく異なる4つの段階の居住痕跡が重複した結果とみた方が良い。

なお、墓坑と認定した遺構の分布に注目すると、7期から9期のものは住居のあいだに点在し、11期のものも中心部に点在する程度である。12b～13期に至ってはじめて住居跡群の分布の中心部に集中するようで、墓坑の環状分布が顕著になるのは、主に12b期に限定された現象である。あわせて注目したいのは、9期の墓坑は数が少ないうえに分布上もまとまりが見られず、10期以降、とくに12期以降の住居に極めて近接、重複を受けていることである。9期に営まれた墓域は、その後の居住活動において、明確に墓域とは認識されていない可能性が高い。集落形成当初からあらかじめ墓域、居住域の環状配置が定められているとするのであれば、墓坑に重複して住居が営まれることはないはずである。

## ②練馬区扇山遺跡(第4・5図)

練馬区扇山遺跡は、石神井川の南岸に位置し、これまでに中期の住居33軒、竪穴状遺構2基、集石3基、土坑10基などが調査されている。住居などの明確な遺構は、北東側の第1・2地点と南西側の第4地点において調査されており、第3地点では中期の明確な遺構は検出されていない。想定される集落跡全体から見れば、ごく一部が調査されているに過ぎない。

扇山遺跡において住居が営まれるのは、中期中葉の6～7期以降と考えられる。第4地点において中葉の住居1軒と小竪穴2基が検出されているが、出土遺物が少なく所産時期が特定できない。うち2基の小竪穴は、炬や明確な柱穴を持たない形態から「阿玉台系住居」である可能性がある。2基の小竪穴と1軒の住居については中葉の所産ということ以上には所産時期を絞り込むことがないため、ひとまずは、阿玉台系住居が見られる6～7期あたりにまず南西側に住居が営まれ、途中断絶の時期を挟みつつ1～2軒ほどの住居が分布する景観で推移したものと想定しておく。その後、しばらく住居は確認できず、9b期に入り北東側に1軒の住居が分布するようになる。周辺の未調査範囲に各時期の住居が残されている可能性を考慮しても、集落の形成当初から9b期にかけては、やはり東西いずれか、あるいはそれぞれに1～2軒の住居が分布するような景観が想定されよう。

10a期には南西側に1軒、北東側に2軒の住居が分布するようになり、10b期は北東側に2軒の住居が分布する。10a・10b期の住居分布からは、南西側、北東側にそれぞれ2軒の住居が分布する様相と想定でき、全体で4軒ほどの分布となろうか。

その後、調査区内では住居が確認されていない10c期・11a期を挟み、11b期には再び住居の分布が確認されるようになる。11b期における住居分布は、10b期以前とは様相が異なり、6軒の住居が北東側に集中する。しかし、その後、軒数は減少、11c1期には2軒、11c2期には2軒、12a期には1軒となり、おそらく10a・10b期と同じような住居の分布状況であったと想定できる。

ふたたび様相が大きく変化するのは12b期以降で、12b期には北東側に9軒の住居が検出されている。また12c期にはそれまで住居分布が認められなかった第2地点に住居が集中し、4軒が検出されている。未調査範囲に想定される住居の分布を考慮すると12b期以降の住居軒数の増加と12c期にみられる住居の集中具合は、さらに顕著となるであろう。そして、13b期には柄鏡形住居1軒が営まれ、扇山遺跡における居住活動は終焉を向かえる。

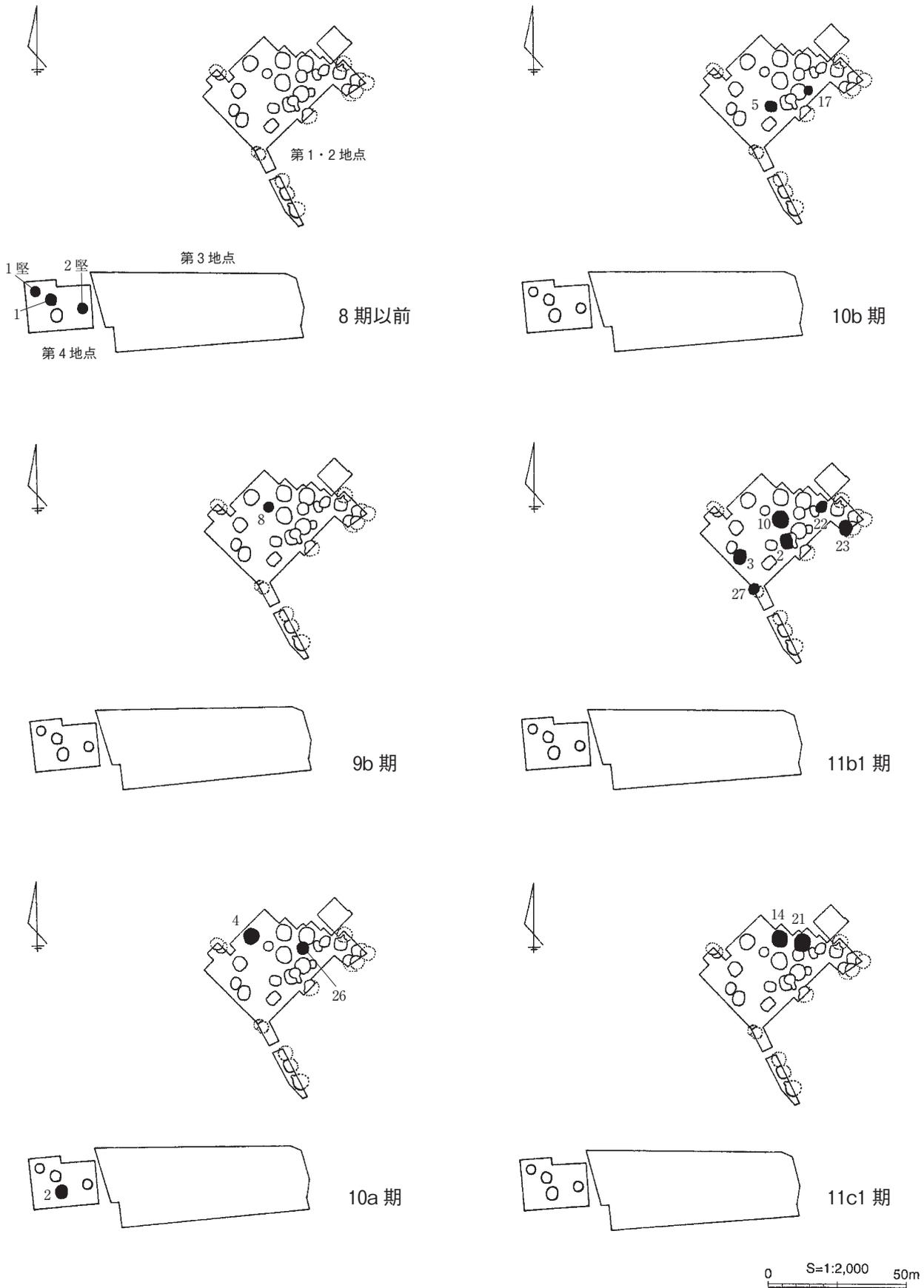


図4 扇山遺跡における時期別住居分布図(1) (S=1/2,000)

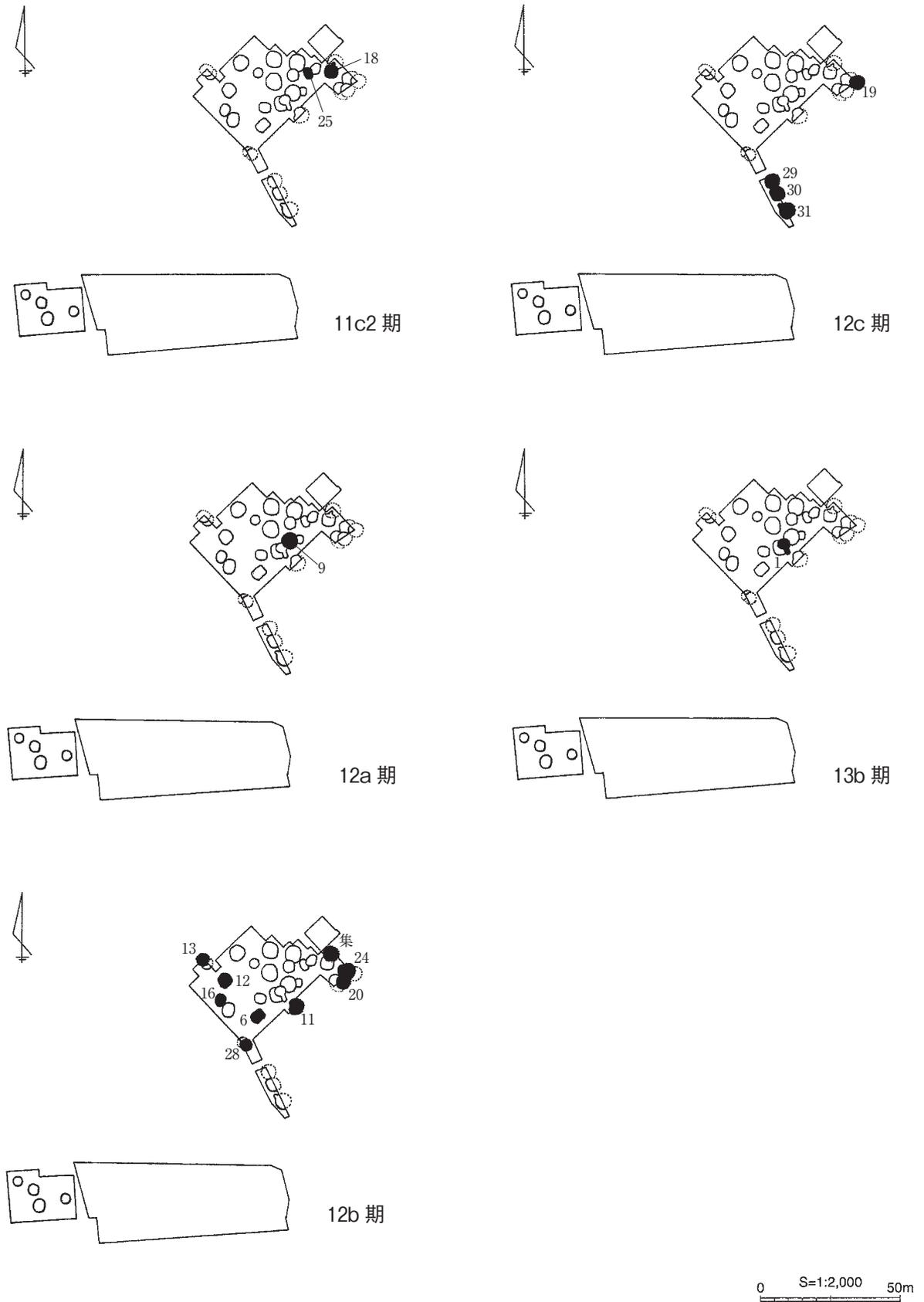


図5 扇山遺跡における時期別住居分布図(2) (S=1/2,000)

以上、扇山遺跡においては、調査面積が少ないため、明確な集落変遷が確認できないものの、中期中葉の6・7期前後から、途中断絶を挟みつつ、9b期までは南西側及び北東側の対称となるような場所のいずれかに1～2軒の住居が点在する景観が想定される。そして10a・10b期にはそれぞれに1～2軒、全体で2～4軒程度の住居が営まれるようになる。さらに11b期には一時的に住居数が増加するものの、11c1期から12a期については、以前と同様の住居分布に戻る。そして、12b期には再び住居軒数が増加、12c期には住居がこれまで営まれていなかった場所に偏って分布するようになる。住居分布の変遷からは、9b期以前、10a・10b期、11b期、11c1～12a期、さらに12b期、12c期、13b期と、いくつもの画期を認めることができる。なお、12b期以降の住居数の増加と12c期における住居の「内進化現象」は、微妙な時期差はあるもの八ヶ谷戸遺跡における集落変遷と同様の傾向を示している。土坑については、所産時期が明らかになったものは少なく、12c期の所産と考えられる土坑1基のほかは、詳細は不明である。

### ③文京区動坂遺跡(第6図)

石神井川は下流域では本郷台を南東に流下し、名称を谷田川と変える。谷田川の谷筋を東に望む台地の縁辺に動坂遺跡は位置する。調査された範囲はそれほど広くはなく、恐らく集落跡の南側のごく一部を調査しているに過ぎないと考えられるが、武蔵野台地上でも最も東端近くに位置する集落遺跡のひとつであることから、大まかな傾向を把握しておくことにした。

動坂遺跡において住居が営まれるようになるのは6b期で、近接して2軒の住居が分布する(3・6号住居跡)。7a期は住居が確認できないものの、7b期にも近接して2軒の住居が分布する(10・11号住居跡)。続く8a期には1軒、9a期には近接して2軒(4・5号住居跡)が分布する。9c期から10a期には3軒が、10b期にも3軒が、10c期・11a期には1軒、11c1期には2軒、11c2期には2軒が、12a期・12b期には1軒の住居が確認できる。細別時期ごとの住居分布を見る限り、近接して2軒の住居が分布する傾向が見られること、10a期以前は南側に偏在していた住居分布が、10b期以降は北側へ広がりを見せ、10a期以前の住居分布とは大きく異なることが確認できる。

南側に住居分布が偏在する10a期以前は、これまでの事例を参考にする限り、最終的に環状に残される住居分布のなかの対称的な位置に同様の一群が遺存する可能性が高く、概ね1～4軒前後の住居が点在する景観で推移していたと考えられる。住居分布が北側に広がる10b期以降については、調査範囲が狭いため全容を想定することは難しい。動坂遺跡では12b期を最後に住居は営まれなくなる。

### ④新宿区落合遺跡(第7～10図)

新宿区落合遺跡は、新宿区中落合四丁目に所在し、武蔵野面に比定される豊島台の一端に立地する。東流してきた妙正寺川が豊島台から南西に向けて突出した台地にぶつかり、大きく南に蛇行する地点を眼下に望む、標高40mほどの台地上に広がる遺跡である。落合遺跡における発掘調査は、昭和25年の國學院大學考古学研究室による調査以来、早稲田大学考古学研究室や目白学園遺跡調査会による調査など、断続的ではあるが学校法人目白学園の校舎改築等に伴う調査や、学園周辺の開発による調査が行われており、これまで都合24以上の地点で調査が行われ、住居95軒以上、集

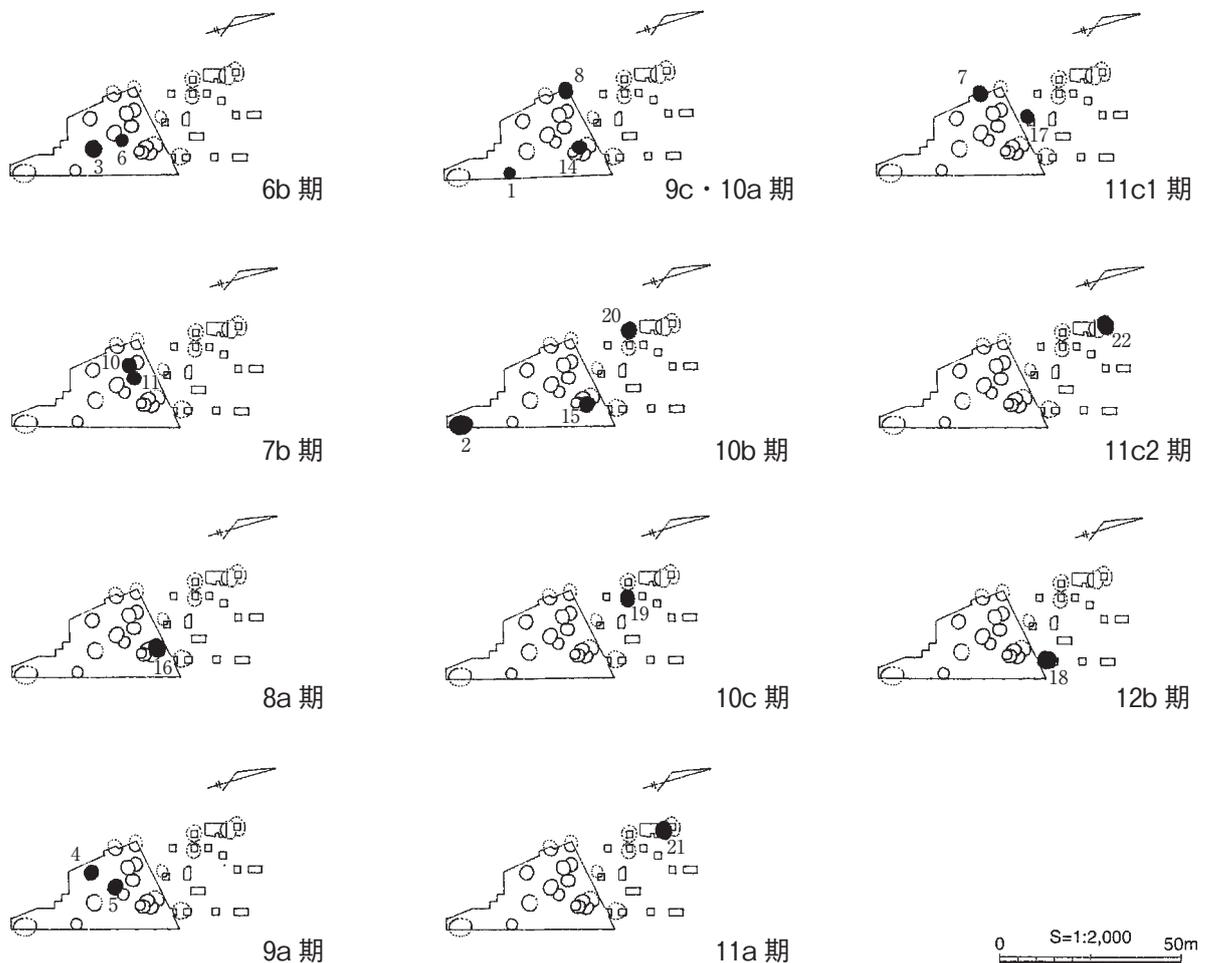


図6 動坂遺跡における時期別住居分布図 (S=1/2,000)

石6基、炉跡4基、土坑54基等が調査されてきた。それら調査成果のすべてについて詳細な調査報告が刊行されているわけではなく、全体像を把握し難い部分がある。今回は、3次以前の調査区と8次調査区については保留し、現在までに明らかにされている範囲で検討を行った。これまでの調査区と住居分布を見ると、恐らく環状を呈するであろう住居分布のうち、北東の一部と南西の一部を除き、ほぼ全体像が把握されつつあると判断できる。

落合遺跡において明確な居住の痕跡が残されるようになるのは7a期である。7a期には台地のほぼ中央、5～7次調査区の中央に1軒の住居が営まれる。続く7b期にはそこから大きく北側に離れた北側斜面にほど近い4次調査区に1軒の住居が分布する。8a期の住居分布はふたたび南側に戻り、7a期に住居が分布した場所に近い5～7次調査区の北寄りに2軒が分布する。そして8b期には再び北側に分布が移る。3軒のうち2軒は重複関係にあり、同時存在はあり得ない。居住が開始された7a期から8b期にかけては、1～2軒の住居が広い台地上に点在する景観が想定され、しかもその分布は台地中央部と北側斜面縁辺において交互に営まれていた。

その後9a期には様相が変化し、これまで交互に居住の場として利用されてきた台地中央部と北

側斜面縁辺の両側に住居が営まれるようになり、しかも軒数が増加、8軒の住居が分布する。西側斜面に位置する10次調査区に位置する住居を含めて、9a期には台地平坦面上に一定の距離をおいて住居が環状に分布していた可能性はある。未調査範囲にも同様の密度で住居が分布しているとすれば、9a期にはかなり急激に住居数が増加したものと考えられる。しかしその状況は長くは続かず、9b期には住居分布は南東側の5～7次調査区に限られるようになり4軒の住居が、9c期にはそこからやや東側に分布範囲が広がるものの台地中央から台地東側縁辺の限られた範囲に4軒の住居が点在する様相を示す。この状況は10a期まで続き、10a期には南東に2軒の住居が分布する。このように9b期から10a期にかけては、9a期までに住居の分布が認められた台地中央から北側縁辺にかけての範囲からは、やや離れた南東寄りの場所を中心に住居が点在する。すなわち、同じ台地上に残された集落跡においても、時期によって居住の中心となる場所は微妙に異なることが確認できる。

10b期以降は、9a期以前に住居が営まれた場所に、再び居住の場が重複するようになる。10b期には北西寄りと南東寄りに1軒ずつ、10c期にも同様に1軒ずつが分布し、ただし、9a期以前の住居分布と比較すると、9a期以前の住居跡を避けるように、その内側に住居が営まれていく。11a期には北西側に1軒、南東側に2軒が、11b期には北西側に2軒、南東側で2軒とやや住居数が増えつつも、10b期以降は同じような場所に繰り返し住居が分布するようになる。11c1期以降、住居分布はさらに内側に寄っていくが、住居軒数自体はほぼ横這いで11c1期には全体で2軒、11c2期には3軒、12a期には2軒の住居が分布する。

ところが12b期になると北西側で5軒、中央付近で11軒と住居軒数が急激に増加する。また分布範囲も11次調査区及び13次調査区に集中する。13次調査区の様相を見る限りでは、12a期までの居住痕跡が累積してきた内側に極端に集中するように見える一方で、11次調査区の様相を合わせてみれば、12a期以前の居住痕跡が累積した環状分布域とは関係なく、居住の範囲が全体的に北側に移動したと考えた方がよい。その後、12c期に1軒の住居が営まれた後、住居は残されていない。

なお、ほぼ中央に位置する第13次調査区では、中葉阿玉台I b式期から後葉加曾利E2式期の墓坑と考えられる土坑が多数検出されている。12b期の住居はこれら墓坑群に近接、一部は重複して営まれており、これも集落形成の断絶性を示す情報のひとつであろう。

落合遺跡における集落跡は、台地上でも限られた場所に1・2軒の住居が分布する7a～8b期の居住の痕跡、一時的に環状に住居が分布した可能性がある9a期の居住痕跡、居住の範囲がやや南東側に広がりつつ1～2軒の住居が分布する9b～10b期の痕跡、さらに9a期以前の住居分布を避けるようにその内側に1～2軒の住居が点在する10c～11a期の痕跡、再び広範囲に住居が点在する11b期の痕跡、そして再び11a期以前と同様の場所に住居が点在する11c1・11c2期の居住痕跡、居住の範囲がきわめて限定された12a期の痕跡、さらに全体的に居住の場が北側に偏在する12b期の痕跡が、時間的に重複した結果、形成されたものである。

##### ⑤ 杉並区塚山遺跡(第11・12図)

神田川中流の南岸に位置し、南側から神田川沿いの低地に張り出す舌状台地上に広がる遺跡である。昭和13年、44年、48年、60・61年と調査が行われた時期が比較的古いこともあり、すべて

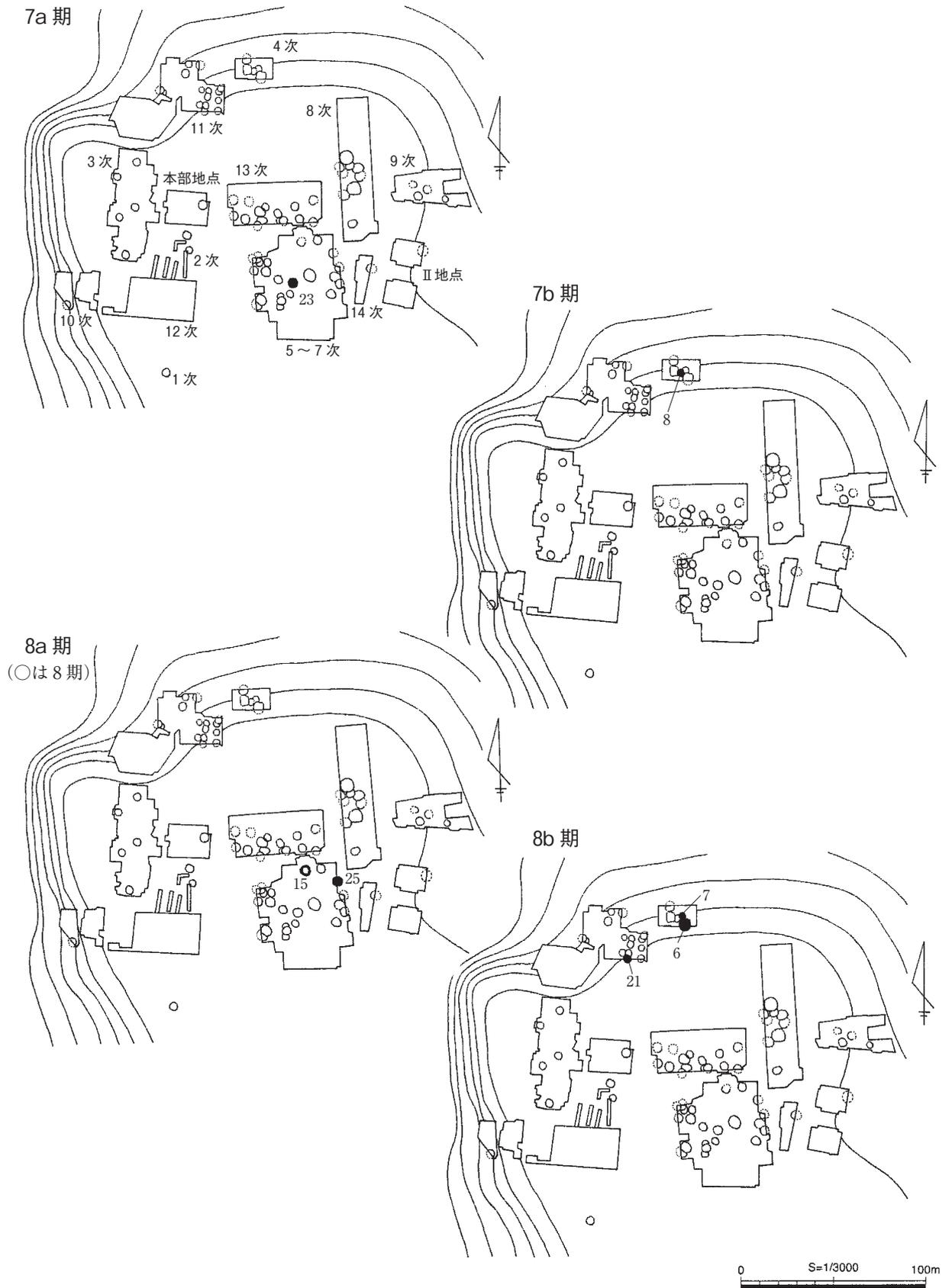


図7 落台遺跡における時期別住居分布図(1) (S=1/3,000)

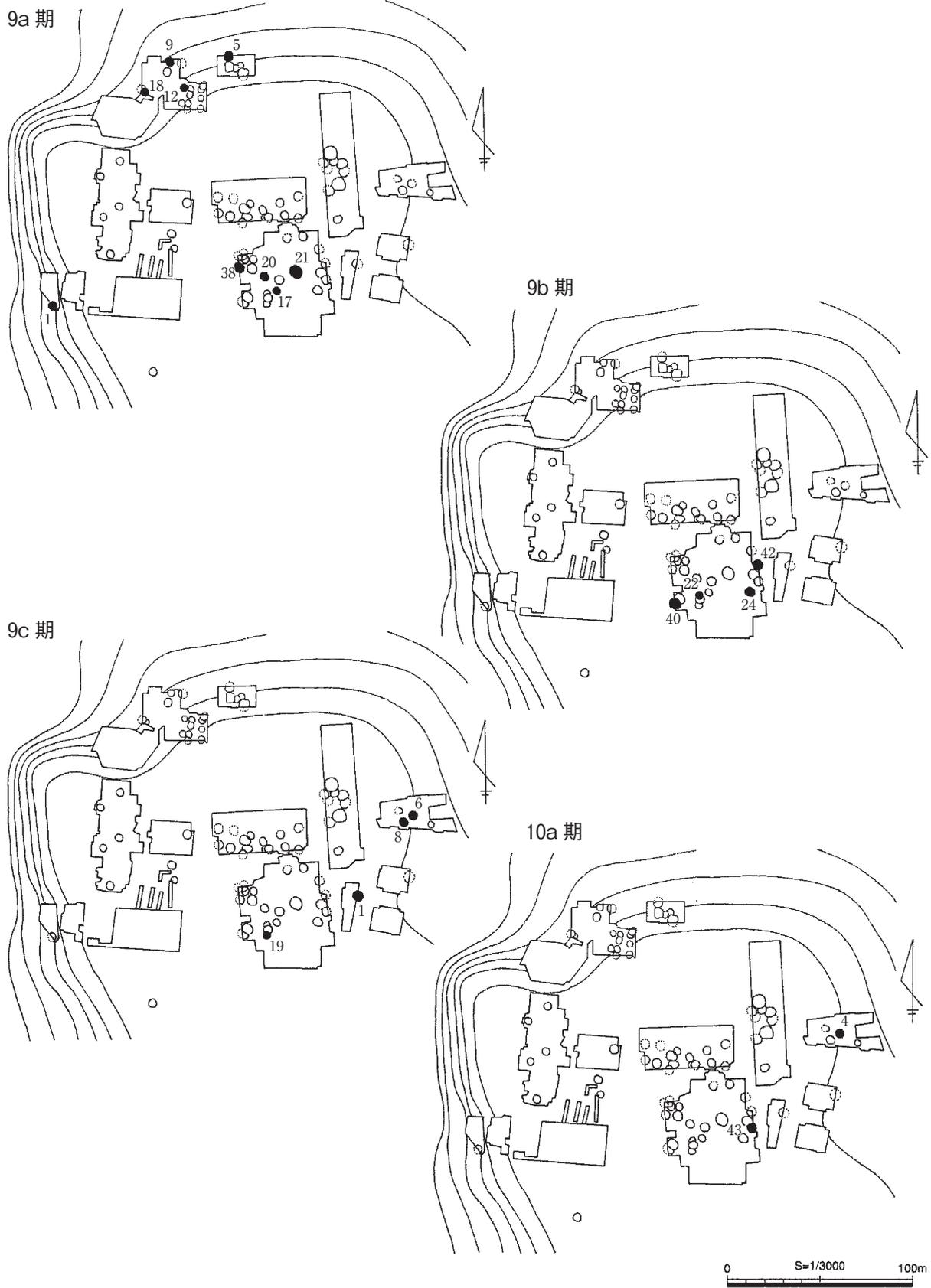


図8 落合遺跡における時期別住居分布図(2) (S=1/3,000)

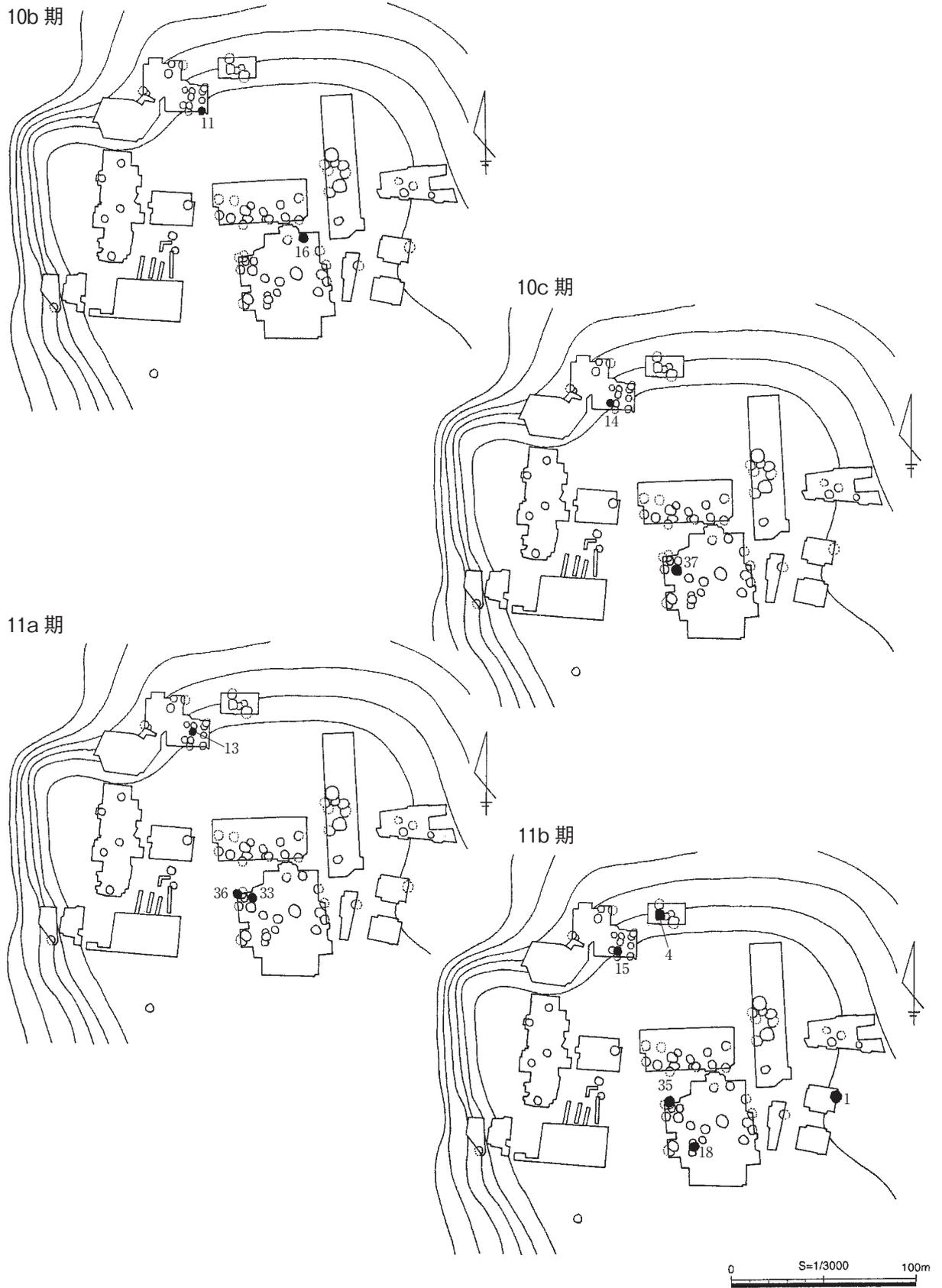


図9 落合遺跡における時期別住居分布図(3) (S=1/3,000)

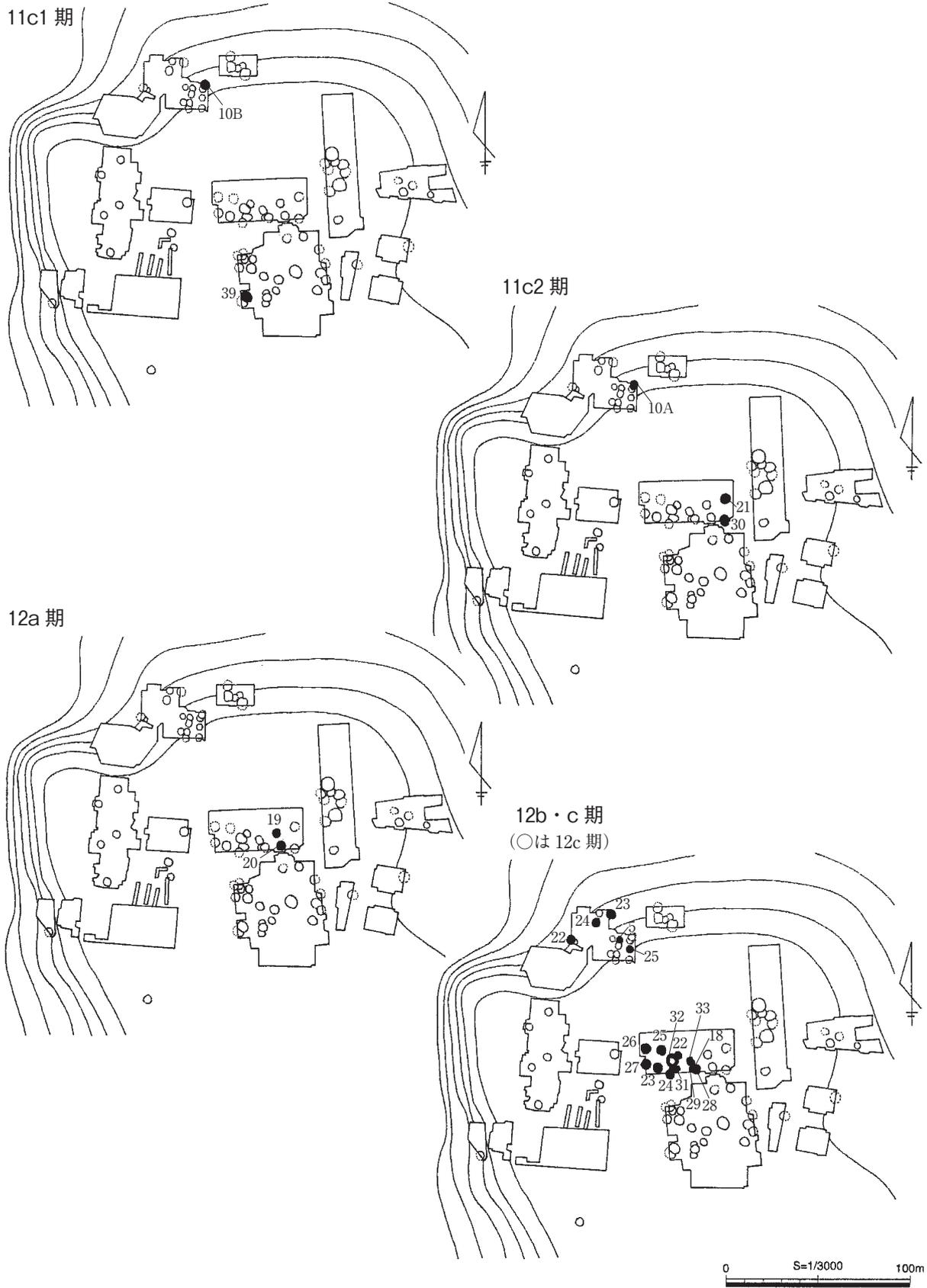


図10 落合遺跡における時期別住居分布図(4) (S=1/3,000)

に詳細な調査報告が公表されているわけではないが、神田川中流域の事例として貴重な遺跡であるため、可能な範囲で検討しておく。これまでの調査では、北側に向かって張り出す舌状台地上に広く中期の住居跡群が残されていると想定される。その南西側の一角がまとまって調査されているほか、南西、北東、南東の一部など、全体の約1/2程度が調査されてきた。ここでは主に昭和60・61年の調査成果に基づき、住居分布の変遷を検討したが、報告書の記載からでは詳細な時期比定ができない住居も少なからず残された。

塚山遺跡の地において住居が認められるようになるのは8a期である。8a期には台地南西寄りに近接して3軒の住居が分布、続く8b期にも南西部に2軒の住居が比較的近接し分布する。なお、8a期か8b期かいずれの所産であるのか判断できなかった住居が南西部に2軒、北西部に1軒分布する。したがって出土土器の細別段階による限りでは、8a期が最大6軒、8b期が最大5軒となる可能性がある。しかし、両時期とも住居が互いに近接することに加え、細別段階が同じことが即同時に機能していたことを示すわけではないことなどを考慮すれば、一時期に機能した住居数はもっと少ないはずである。続く9a期は南西部に1軒、9b期は南西部に2軒の住居が分布する。台地上北東側が未調査であるため確実ではないが、他の検討事例と同様に対となる北東部に同段階の住居が分布する可能性も考慮しておく必要があるだろう。

9c期には南東部及び南西部にそれぞれ1軒の住居が分布する。10a期には北西部に近接して2軒が分布するのに対して、10b期には南部に2軒が近接し、さらに西部に1軒、合計3軒の住居が分布する。続く10c期には西部に2軒が分布する。その後11a期については現在までのところ住居は検出されておらず、11b期には南東部に1軒、11c1期には南西部に2軒が分布するとともに、西部には11c1から11c2期にわたって複雑に重複する3軒の住居が分布している。その後、12a期には南側に2軒が一定の距離をおき分布する。そして、12b期から12c期にかけては、南西部を中心に都合9軒ほどの住居が、一部複雑に重複しながら分布する様相が確認できる。

調査範囲が限定されていることもあり、全容はなかなか判断できないが、塚山遺跡では8a期から住居の分布がみられ、8a期、8b期においてやや住居軒数が多い傾向が窺えるものの、その後は概ね1～3軒程度の住居が点在する景観が想定できる。それら住居の分布が時期により微妙に位置を変えながら重複・累積したことで台地上に広がる集落遺跡が残されるに至っている。住居の分布様相が大きく変化するのは12b期であるとともに、12c期を最後に住居は確認できなくなる。

#### ⑥ 新宿区市谷甲良町・加賀町二丁目遺跡(第13・14図)

市谷甲良町遺跡・加賀町二丁目遺跡は、北側を東流する神田川により、南側を旧平川から延びる小支谷により画された東西方向に延びる台地上に位置しており、集落の西限は神田川から南に入りこむ旧白鳥川の小支谷により画されている。現在までに20軒あまりの中期の住居が調査されているほか、後期の住居、土坑等も調査されており、中期から後期前葉に及ぶ土地利用痕跡の存在が明らかにされてきている。これまでに調査されてきた住居の分布を見ると、径100mほどの環状に展開する集落跡の存在が想定され、そのうち南側及び北側の一部が調査されている。

細別時期ごとの住居分布をみていくと、7a期には南側に1軒の住居が分布、続く7b期には北側に1軒の住居が分布する。その後、居住地としての利用は断絶し、再び住居が検出されるのは10a

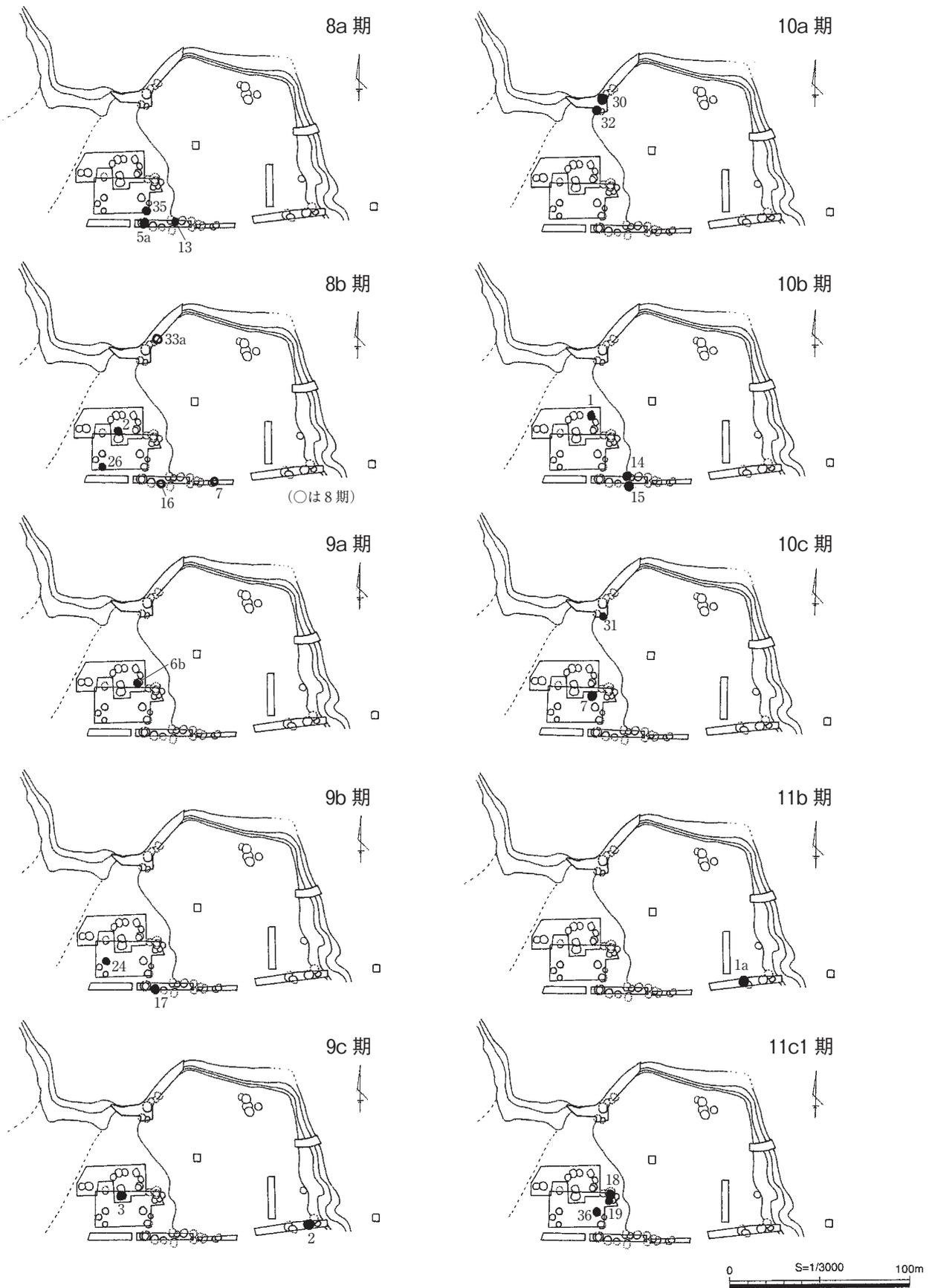


図11 塚山遺跡における時期別住居分布図(1) (S=1/3,000)

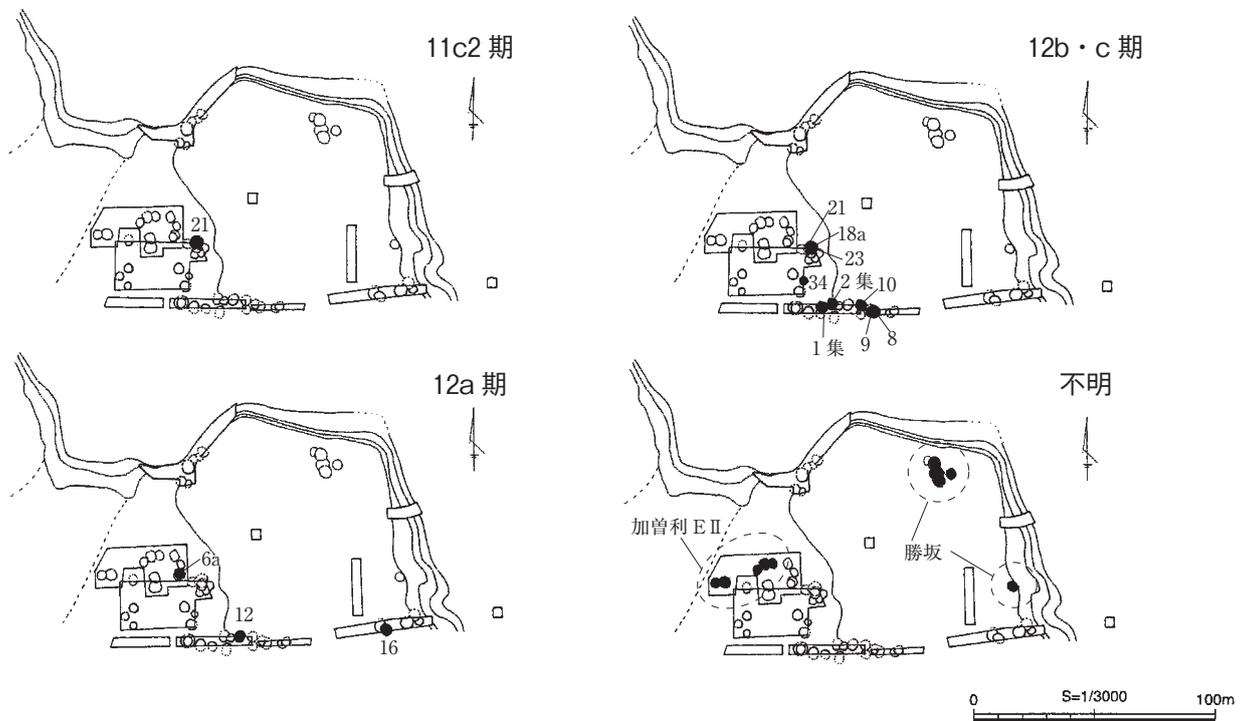


図12 塚山遺跡における時期別住居分布図(2) (S=1/3,000)

期である。10a期には南西側に1軒の住居が分布する。その後、また断絶し、再び住居が認められるようになるのは11a期以降であり、11a期には南側に1軒、11b期には北側に1軒、11c1期には北側に2軒、12a期にも同じく2軒の住居が分布する。

想定される居住域の広がりと比較して既調査範囲が狭いため、これまで住居が確認されていない時期についても、未調査範囲に住居が分布している可能性があるが、7a期から12a期にかけては、途中居住の断絶する時期を挟みつつ、約100メートルほどの距離を挟んで、南北に対峙するように1軒の住居が交互に、あるいはそれぞれ1～2軒の住居が分布するような景観であったものと想定され、全体で1～4軒程度の住居が点在するような景観で推移したものと想定できよう。

ところが、12b期から12c期にかけては、様相が大きく変化する。住居軒数が増加するばかりか、それ以前の住居分布のあり方とは大きく異なり、一時的にはであるが、住居は環状に分布する様相を見せる。これら住居のほとんどが堅穴の掘り込みが明確ではない、あるいは掘り込みが極めて浅い「加曾利E3」面想定住居である。そして中期においては13a期に営まれた21号遺構を最後に住居は営まれなくなる。

ただし市谷加賀町二丁目遺跡では、4次調査区で称名寺式期(15期と表記)の住居1軒や、2次調査区で後期前葉の住居2軒などが検出されており、後期初頭から前葉にかけて再び居住域として利用されている。

#### ⑦ 新宿区三栄町遺跡(第15図)

江戸城外堀の谷筋にあたる旧平川の谷筋から、さらに西へ伸びる旧紅葉川の南側台地上に位置し、

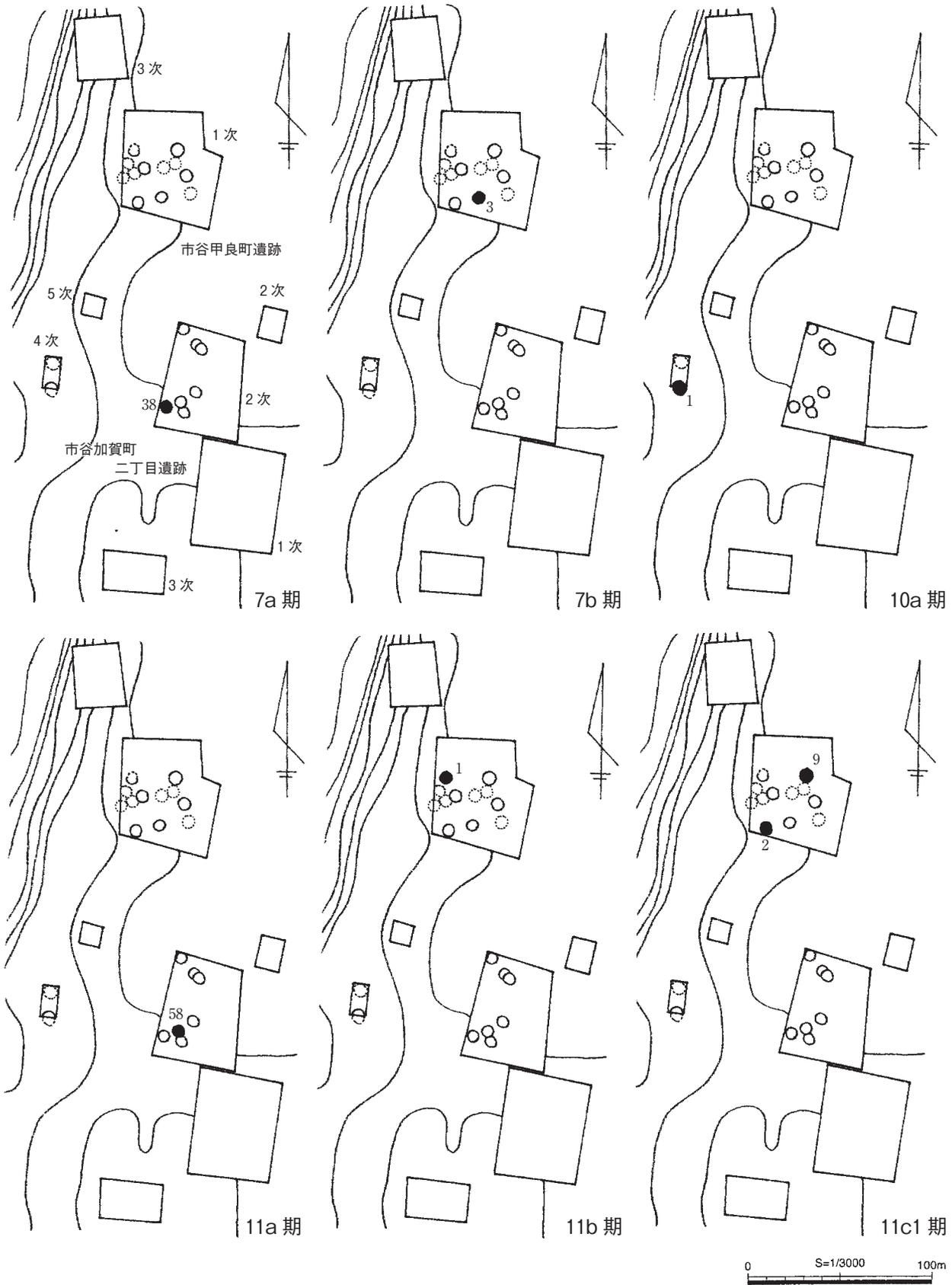


図13 市谷甲良町・加賀町二丁目遺跡における時期別住居分布図(1) (S=1/3,000)

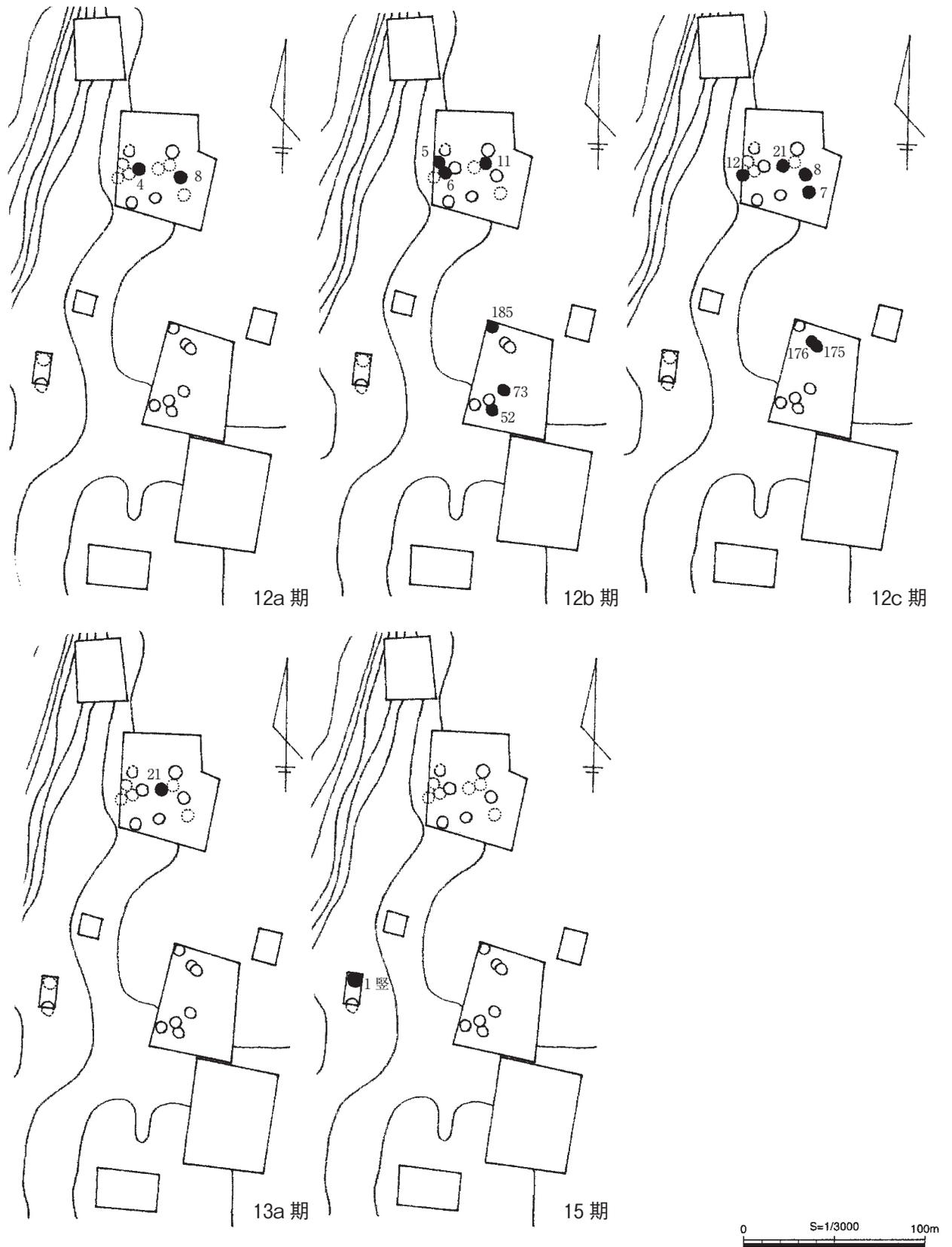


図14 市谷甲良町・加賀町二丁目遺跡における時期別住居分布図(2) (S=1/3,000)

下末吉面に該当する淀橋台の標高 32～34 m を測る台地上に立地する。9 次に及ぶ調査が行われており、これまでに 40 軒の住居が調査されている。当遺跡の西側には南北方向に深い小支谷が刻まれているが、ここは江戸時代には松平摂津守上屋敷が位置し、谷頭の湧水点を利用した作庭がなされ、「津の守池」と呼ばれていた。この谷筋よりも東側の北側に張り出す舌状台地上平坦面を中心に中期の住居群が残されている。これまでに確認された住居の分布から想定される集落域の広がりに対して、約 2/3 程度が調査されている。北西、南西の一部が未調査範囲に広がる可能性があるが、集落跡の大半は既調査範囲にあたるものと考えられる。

三栄町遺跡において住居が営まれるようになるのは 8b 期であり、6 次調査区の南東部に 1 軒の住居が分布する。続く 9a 期には、そこから約 120 メートルほど離れた西側に 1 軒の住居が分布する。集落跡形成当初の集落景観は、1 軒あるいは、未調査範囲の広がりを考慮しても 2 軒程度の住居が距離をおいて点在するような景観と考えて間違いなかろう。その後、9b 期から 10a 期に該当する住居は現在のところ確認されていない。しかし 9 次調査の第 1 号住居跡覆土上層から 9c～10a 期の遺物が出土していることから、第 1 号住居跡がこの時期には廃絶され遺物投棄の対象となっており、周辺の未調査区に当該時期の住居が存在する可能性がある。恐らく 9 次調査区の北側あるいは南側の未調査範囲に残されている可能性があるが、第 1 号住居跡に廃棄された遺物量を見てもそれほど多くなく、当該時期の住居が存在したとしても 1～2 軒程度であろう。

10b 期に入ると再び住居が確認できるようになるが、東西に約 100 メートル以上の距離をおいて対峙するように位置する。東西に一定の距離をおいて住居が対峙するように分布する景観は、10c 期、11a 期、11b 期にも共通して認められるが、それぞれの時期では、住居の占拠が微妙に位置をずらしている。同時に存在すると考えられる住居数は 2～3 軒程度であり、未調査範囲を考慮しても全体で最大 4 軒程度であろうか。もちろん、細別時期が同一の住居すべてが、同時期に機能していたか否かは別の問題である。

以上のような住居分布に変化が見られるようになるのが 11c 期であり、南西側に位置する 5 次調査区から 6 次調査区の南側にかけて 4 軒の住居が、比較的限られた場所に集中するようになる。前段階までと同様に 100 メートルほどの距離をはさんで別に一群の住居跡が存在するとすれば、9 次調査区北側の未調査範囲に分布する可能性は高く、都合 8 軒以上の住居分布となる可能性がある。しかし、南側に集中する住居はお互いに極めて近接していること、さらに 11c 期は本来 11c1 期と 11c2 期に細別できる時間幅を有することから、そのすべてが同時期に存在した可能性は極めて低い。

続く 12a 期以降の住居分布は、それ以前の住居が残された場所から内側に寄って無秩序に広がりを見せるようになり、その傾向は 12b 期、12c 期に入るとさらに顕著となる。これまで見てきた各段階の対称的な住居分布の中心となる場所に無秩序に住居が分布する。あわせて、これら住居のほとんどが堅穴の掘り込みが明確ではない「加曽利 E3」面想定住居である。そして、13a 期に入ると住居数は激減、第 6 次調査第 6 号住居跡を最後に、居住域としての土地利用を終えている。

#### ⑧ 渋谷区鶯谷遺跡(第16～18図)

渋谷区鶯谷遺跡は、渋谷川の西岸台地上に位置する遺跡である。2 次に及ぶ調査によって集落遺

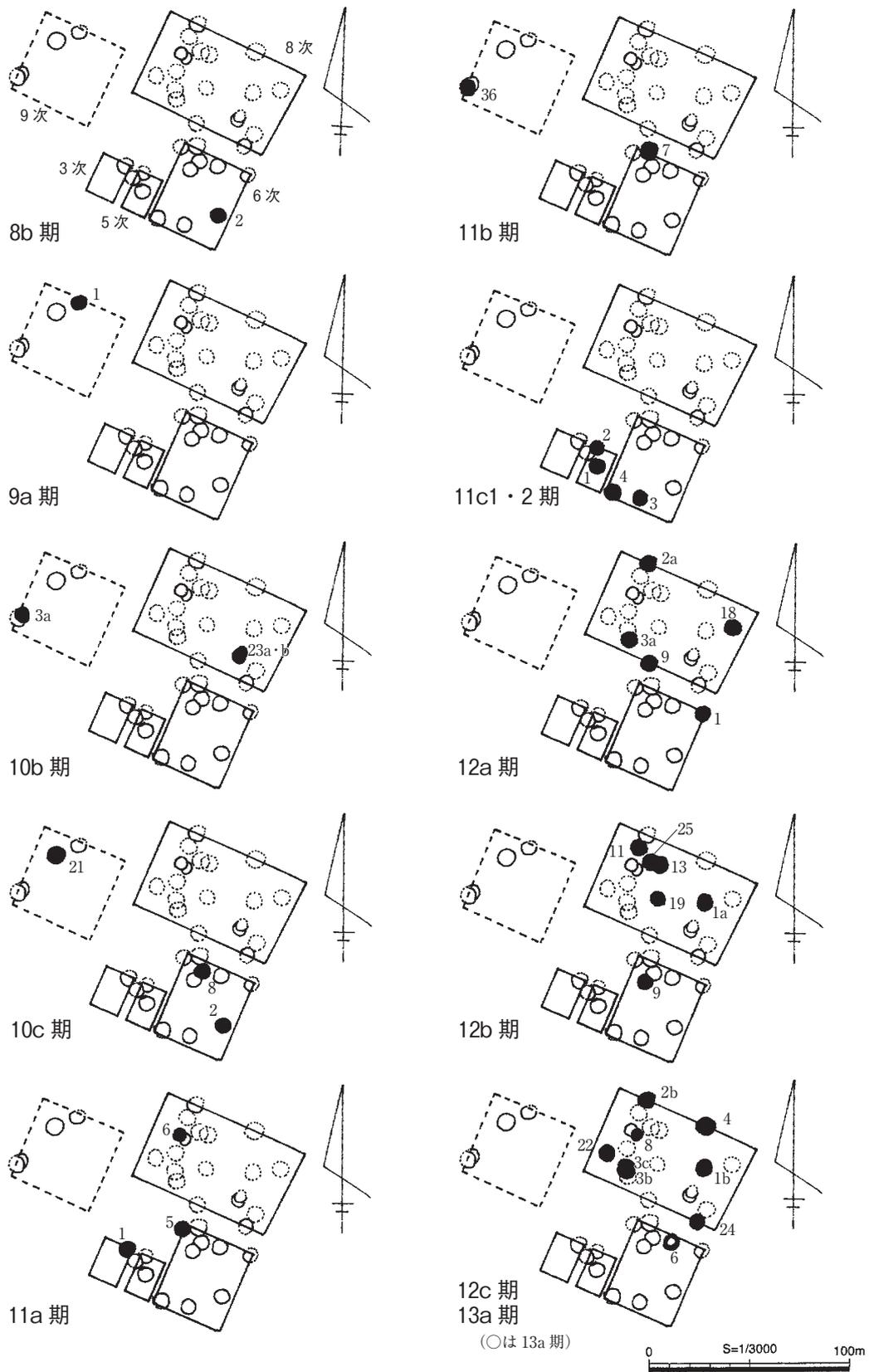


図15 三栄町遺跡における時期別住居分布図 (S=1/3000)

跡の大部分が調査されており、調査区内における住居群の分布状況から想定する限り、東側の一部で既存建物により破壊された部分があるほか、北側の一部がさらに調査区外に広がる可能性がある。これまでの調査において、住居 88 軒、屋外炉・屋外埋甕炉 23 基、屋外埋甕 14 基などが調査されている。なお本稿では、屋外炉、屋外埋甕として報告された遺構のうち、周囲の状況からみて 1 軒の住居の痕跡と判断できるものについては、1 軒の住居として取り扱った。

鶯谷遺跡において住居が確認されるのは、5c 期あるいは 6a 期である。1 次調査区のほぼ中央に 1 軒の住居が分布することから当地における居住活動が開始されている。続く 6b 期には西側斜面上に 1 軒が分布、7a 期にはこのすぐ北側に近接して小竪穴 1 基が分布するなど、5c あるいは 6a 期から 6b 期、7a 期には、広い尾根上に 1 軒の住居が分布する景観が想定される。続く 7b 期から 8b 期にかけては、調査区中央の標高が最も高い場所を挟むように 2～3 軒の住居が分布する傾向が続く。ただし 7b 期には同一細別段階の住居分布とは離れた北側に屋外埋甕 1 基が分布し、この埋甕が本来住居施設に伴うものか否かについては具体的な検討ができなかったが、これが仮に住居の痕跡であったとすると、居住域はやや北側にも広がり、最大で 3 軒の住居が分布することとなる。その後、8a 期、8b 期はやはり南側の標高が高い場所を挟むように東西に住居が分布し、8a 期には東西に 1 軒ずつ、8b 期には東側に 2 軒、西側に 1 軒の住居が対峙するように分布する。

その後、9a 期以降は住居分布の中心はやや北側に移動する。9a 期の住居は 1 次調査区の北側に半弧を描くように 3 軒が点在し、9b 期もほぼ同様の場所に 2 軒の住居が点在する。その後、9c 期には北側で屋外埋設土器 1 基が分布するのみとなり、10a 期、10b 期の住居は確認できていない。

再び住居が確認できるのは、10c 期で、東側の 2 次調査区内に 1 軒が、11a 期には北寄りに 3 軒の住居が一定の距離をおいて点在する。11b 期には 1 次調査区内において東西に 2 軒ずつ、11c1 期には東側に 2 軒の住居が分布する。10c 期から 11c1 期については、台地北寄りの場所において東西それぞれに 1～2 軒ずつの住居が点在する景観が復元される。

11c2 期になるとやや様相が変わり、それ以前に残された住居群の内側に偏在して住居が分布するようになるとともに、住居軒数も増加、11c2 期には 6 軒、12a 期には 5 軒の住居が比較的限られた範囲に分布するようになる。12b 期になると、住居数はさらに急増し、これまでの住居跡群が環状に累積して分布する範囲一面に住居が営まれる一方、それまでまったく住居の分布が見られなかった南側の斜面上、南西に伸びる尾根上などに住居分布が広がり、12c 期も引き続き同様の分布傾向を示す。

なお、12b・c 期には、同時期の所産と判断した住居同士が複雑に重複することが、それ以前の時期に比べて大きな特徴でもある。分布図において確認できる住居の重複関係に限っても最大 3 軒の住居が重複する事例が確認できる。また別々の遺構として調査された住居跡同士の重複とは別に、1 基の竪穴の住居回数を合わせてみるとさらに複雑な重複関係が復元できる。例えば 1 次調査の 24 号住居は 12b 期のあいだに 3 回の住居回数を数え、12b 期のうちに覆土の堆積が完了し、そのうえから貯蔵穴が構築され、さらに 12c 期には住居施設の一部と考えられる埋甕が重複する。また 1 次調査 27 号住居は、12b 期のあいだに 2 回の住居回数を数え、さらに 12b 期のうちに貯蔵穴が重複して構築され、さらに 12b～c 期までのあいだに竪穴の埋没が完了、住居施設の痕跡と考えられる 3 号焼土が重複する。12b・c 期の住居は掘り込み自体あまり深くないこともあり、廃絶後の堅

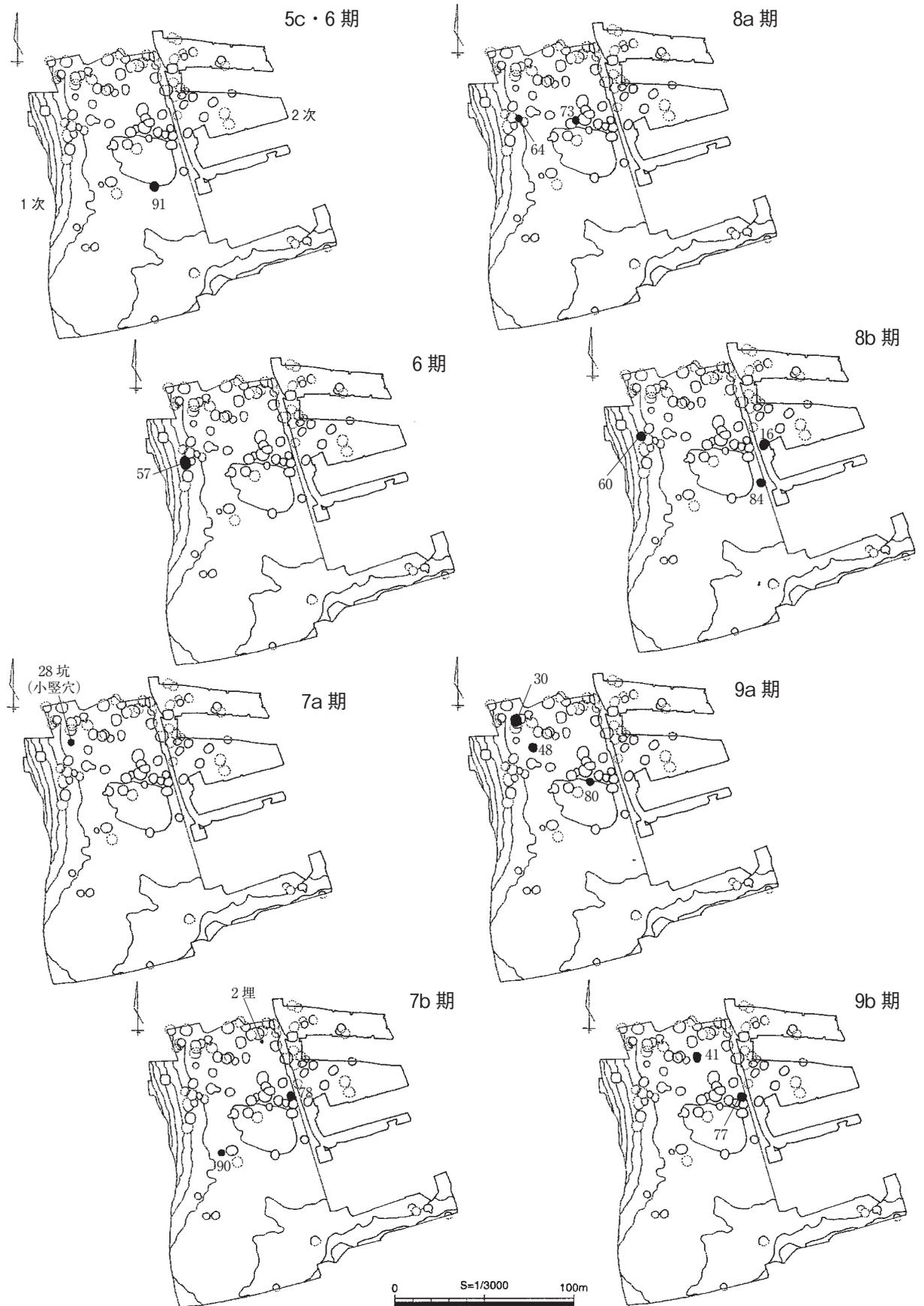


図16 鷺谷遺跡における時期別住居分布図(1) (S=1/3,000)

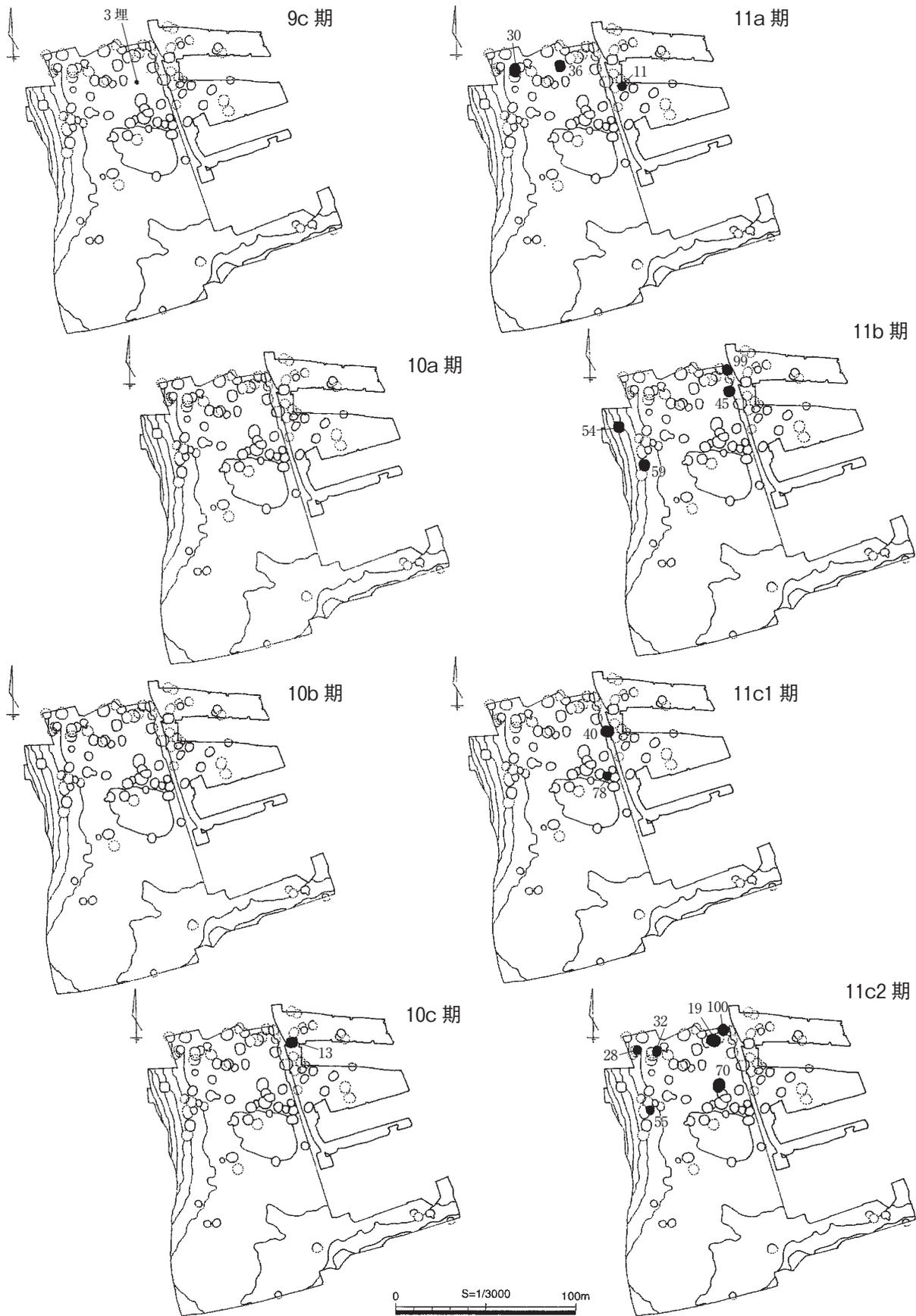


図17 鷺谷遺跡における時期別住居分布図(2) (S=1/3,000)

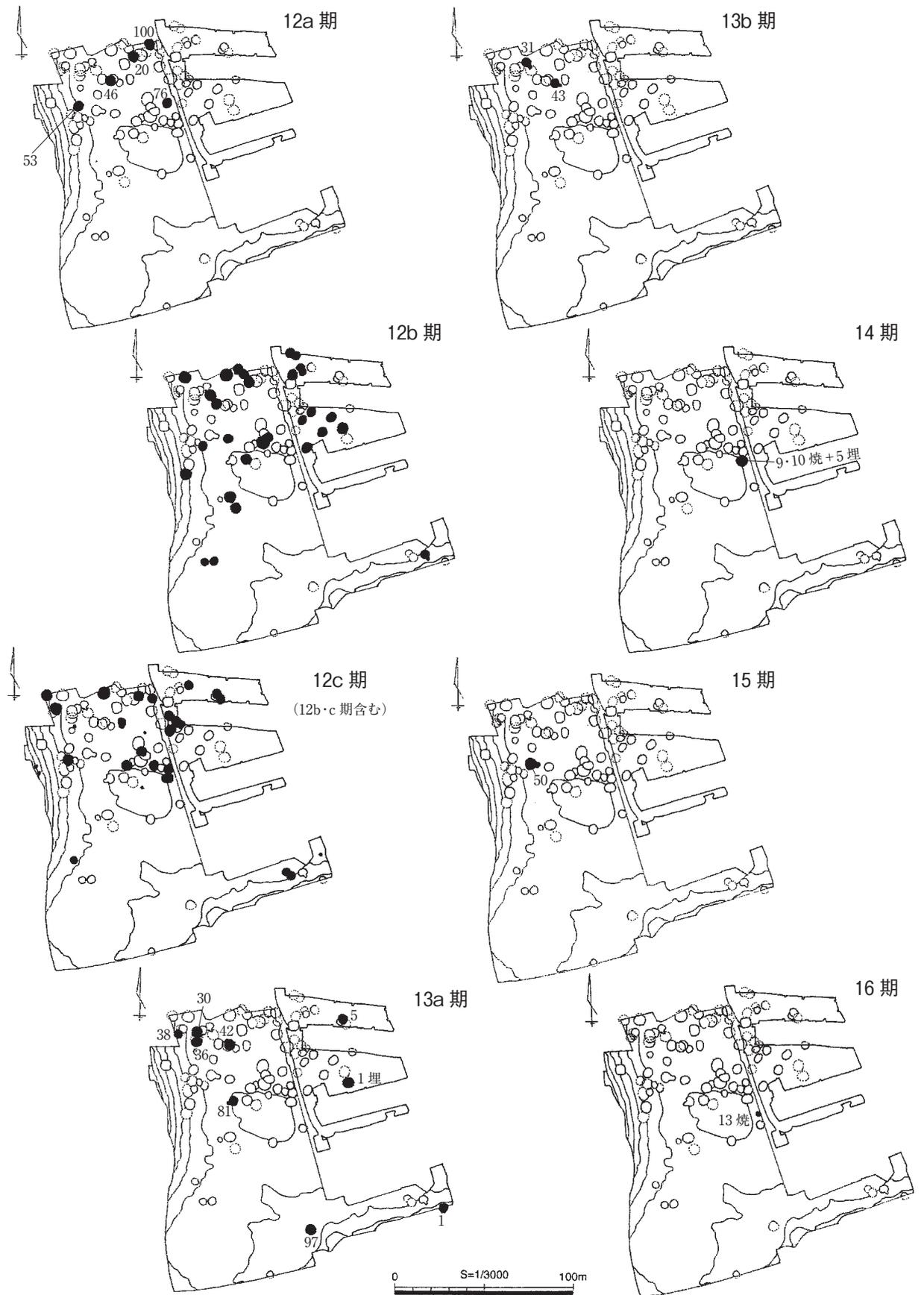


図18 鷺谷遺跡における時期別住居分布図(3) (S=1/3,000)

穴の埋没にはそれほど時間を要しないと考えられるが、それでも上層に貯蔵穴や住居が重複して構築されるためには、それなりに堅穴の埋没が進行する時間が介在したはずである。したがって、12b・c期においても同時期に機能していたであろう住居数は、細別時期ごとの住居分布に示された住居数よりかなり少なくなることは確実である。このことに関しては、改めて後述する。

13a期に入ると、住居の軒数はやや減少するものの、12b・c期と変わらず住居分布範囲は極めて広い範囲に広がりを見せている。その後、住居軒数は減少、13b期には柄鏡形を呈する住居2軒、14期には住居1軒、15期にも柄鏡形住居が1軒というように、ふたたび住居が点在する状況となり、16期(称名寺Ⅱ式期)の焼土1基を最後に、当地での居住痕跡は確認できなくなる。

今回は具体的な検討はできなかったものの、鶯谷遺跡では、明らかに貯蔵穴と考えられる土坑が12b期から15期まで構築されるのに対して、墓坑と考えられる土坑の構築は13b期に限定されていることも興味深い。

#### ⑨ 世田谷区明治薬科大学遺跡(第19・20図)

世田谷区明治薬科大学遺跡は、目黒川の支流である蛇崩川の右岸、標高33mほどの台地上に位置する。住居96軒、堅穴状遺構4基、土坑58基、集石土坑2基、屋外炉1基、屋外埋甕18基、伏甕1基、掘立柱建物4棟などが調査されており、調査成果から想定される集落跡の広がりのうち約1/3が調査されている。

明治薬科大学遺跡において居住が開始されるのは7b期で、調査区中央に1軒、さらに離れた調査区北西隅に1軒、計2軒の住居分布が確認される。続く8a期も同様に西側に2軒が分布しており、居住が開始された当初は、調査区内でも西寄りの場所を中心に、後の住居の環状分布域とはあまり関係のない場所に距離をおいて2軒程度の住居が分布する。その後、8b期には南側を中心に3軒の住居が点在するものの、9a期には再び住居が西側に集中、5軒の住居が分布するが、うち2軒は重複関係にある。9b期には南側にやや広がりを見せるものの、西側への集中傾向は変わらず、西側に8軒の住居が、9c期には3軒が偏在する。続く10a期も同じ傾向が続き、西側に3軒の住居が分布するが、うち2軒は重複関係にあることから、同時期に機能した住居は1～2軒であろう。

以上のように、南側に住居分布が広がりをみせる8b期、9b期を除き、7b期から10a期にかけては、調査区でも西寄りの場所に住居が偏在し、一時期に機能したと考えられる住居も少ない。

大きく状況が変化するのは10b期で、それ以前まで住居分布の中心となってきた西側には住居が認められなくなる一方で、全体的に住居分布の中心が東側へ移動している。10b期の住居分布は、半弧を描くように7軒の住居が分布するが、10c期以降、再び住居軒数は減少し、10c期に3軒、11a期には5軒が分布する。その後、11b期には2軒、11c1期にも2軒と軒数は減少するものの、10b期以降の住居分布を踏襲するような場所に繰り返し住居が分布する。11c2期にはやや軒数が増加するものの分布の傾向に大きな変化は認められない。その後、12a期さらに12b期から12c期にかけては、10b期から11c2期にかけての住居跡が累積された場所から内側に偏って、住居が分布、同時に急激に住居軒数が増加する。ただし住居同士は複雑な重複関係が認められ、同時期に機能したと考えられる住居数はかなり限定されるものと考えられる。その後、13a期には北寄りに4軒が分布、13b期には距離をおいて2軒の住居が分布するようになり、13b期を最後に住居は確認でき

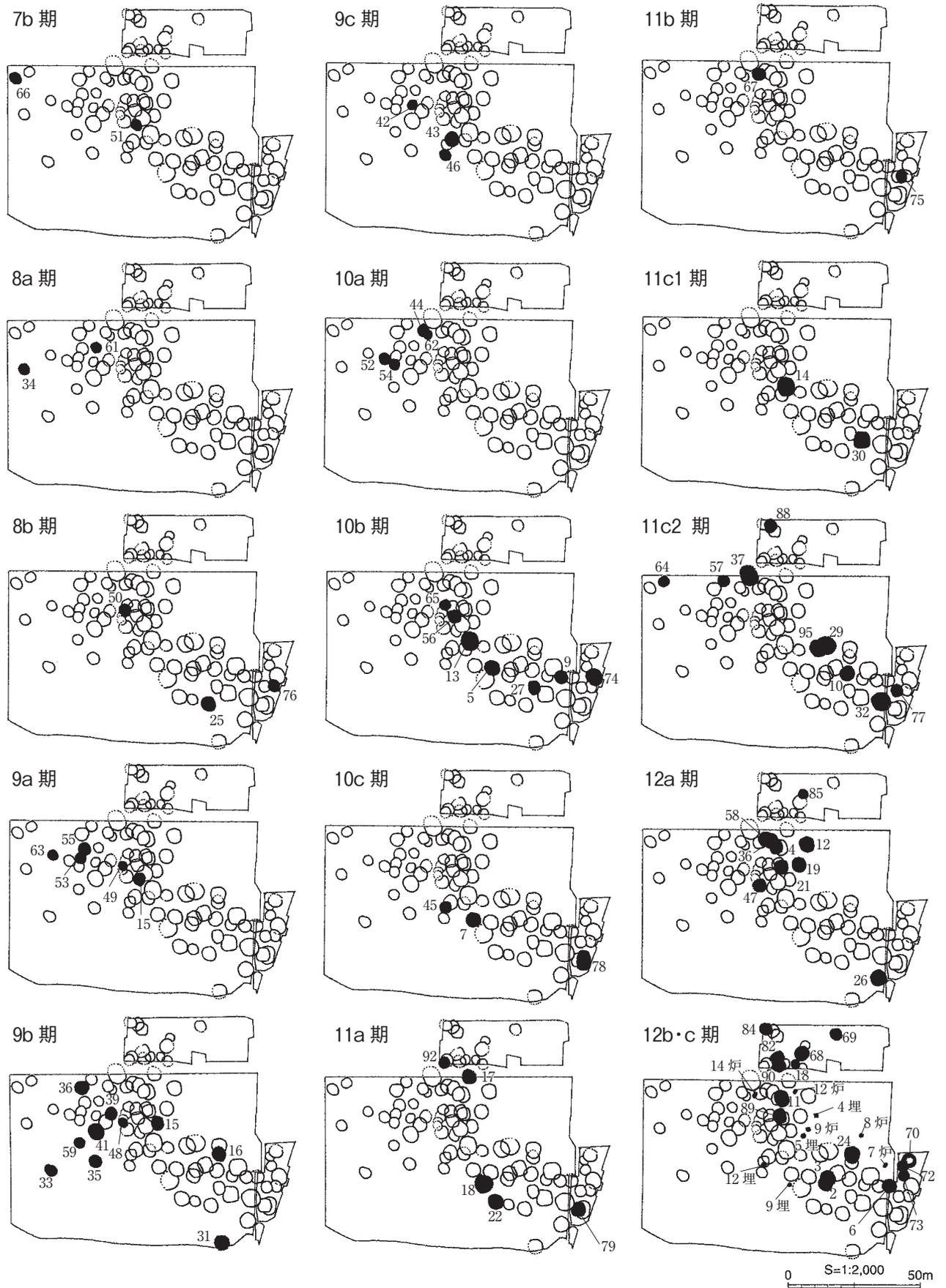


図19 明治薬科大学遺跡における時期別住居分布図(1) (S=1/2,000)

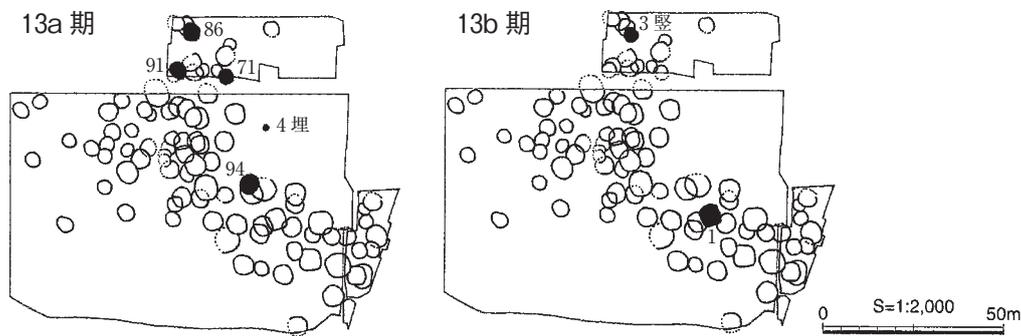


図20 明治薬科大学遺跡における時期別住居分布図(2) (S=1/2,000)

なくなる。

以上のように、西寄りの場所を中心に住居が分布する7b期から10a期にかけてと、そこから居住の中心が移動し、東寄りの場所に住居が分布する10b期から11c2期、住居軒数が増加し北寄りを中心に展開する12b期以降、と大きく3つの画期が認められる。またそれぞれ時期における住居数は一定せず、増減を繰り返している。

#### ⑩ 狛江市弁財天池遺跡(第21～25図)

狛江市弁財天池遺跡は、標高24mを測る多摩川北岸の立川面上に立地する。多摩川流域という単位で考えると立川面上に立地する中期の集落遺跡としては最下流に位置する遺跡である。遺跡は立川面上に形成された湧水点である弁財天池から流下する旧清水川の谷筋と旧野川に挟まれた舌状台地の付け根部分を中心に広がる遺跡である。弁財天池の北側から東側にかけて弁財天池遺跡として周知化されているほか、北西側には経塚遺跡、北側には東塚遺跡といった遺跡が広がっており、各遺跡において縄文中期の住居が検出されている。弁財天池遺跡の集落景観については、旧稿[宇佐美2006]で検討したことがあるが、その後の調査成果を含め、また周辺遺跡にも検討対象の範囲を広げて再度検討しておきたい。

弁財天池遺跡周囲の地が居住地として利用されるようになるのは7b期である。7b期の住居は12・13次調査区から15次調査区の北寄りを中心に分布する。15次調査区では4軒の住居が検出されているが、いずれも出土遺物が少なく詳細な時期比定が難しい住居であり、なかには7a期以前の住居が含まれている可能性がある。また互いに近接していることから、同時に機能した住居は少なくなろう。7b期以前、8a期、8b期までは、基本的に12～14次調査区から15次調査区、17次調査区を中心とした北側が居住の中心となる。ただし8b期になると南側の離れた位置に1軒の住居が営まれるようになることから、住居分布からみればひとつの画期となる。

その後、8b期に営まれた1軒の住居に重複するような場所に9a期には3軒の住居が分布する。9b期には住居分布は再び北側に拡散する様相を見せるが、9c期以降は北側に住居が分布しつつも東側にまとまりをみせはじめ、9c期には7軒、10a期には5軒、10b期には6軒の住居が分布するようになる。そして10c期には1軒と一旦住居軒数が落ち込み、10c期以降には、それ以前に居住の中心となってきた12・13・15・17次調査区には住居が営まれなくなる。11a期以降には東側に

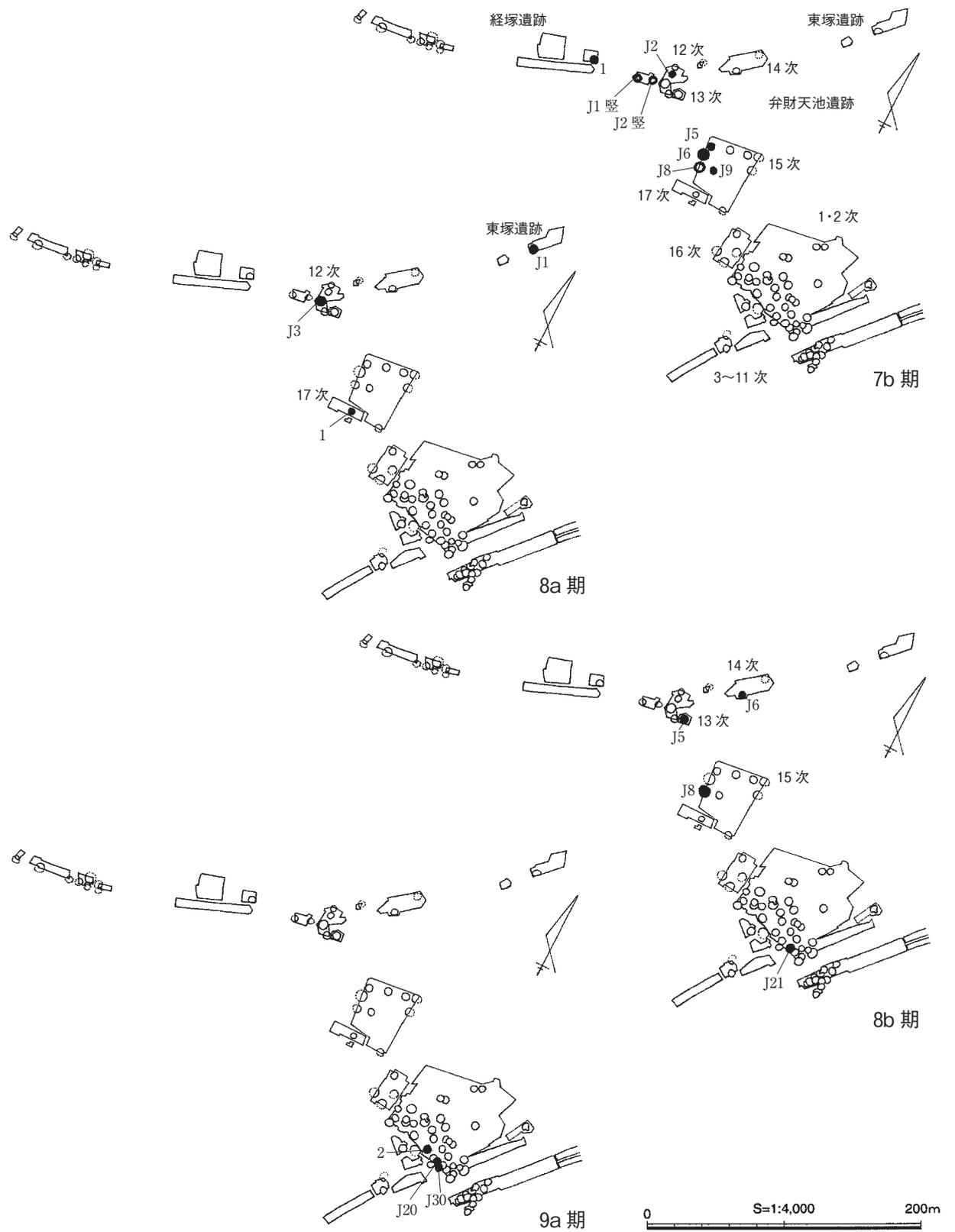


図21 弁財天池遺跡における時期別住居分布図(1) (S=1/4,000)

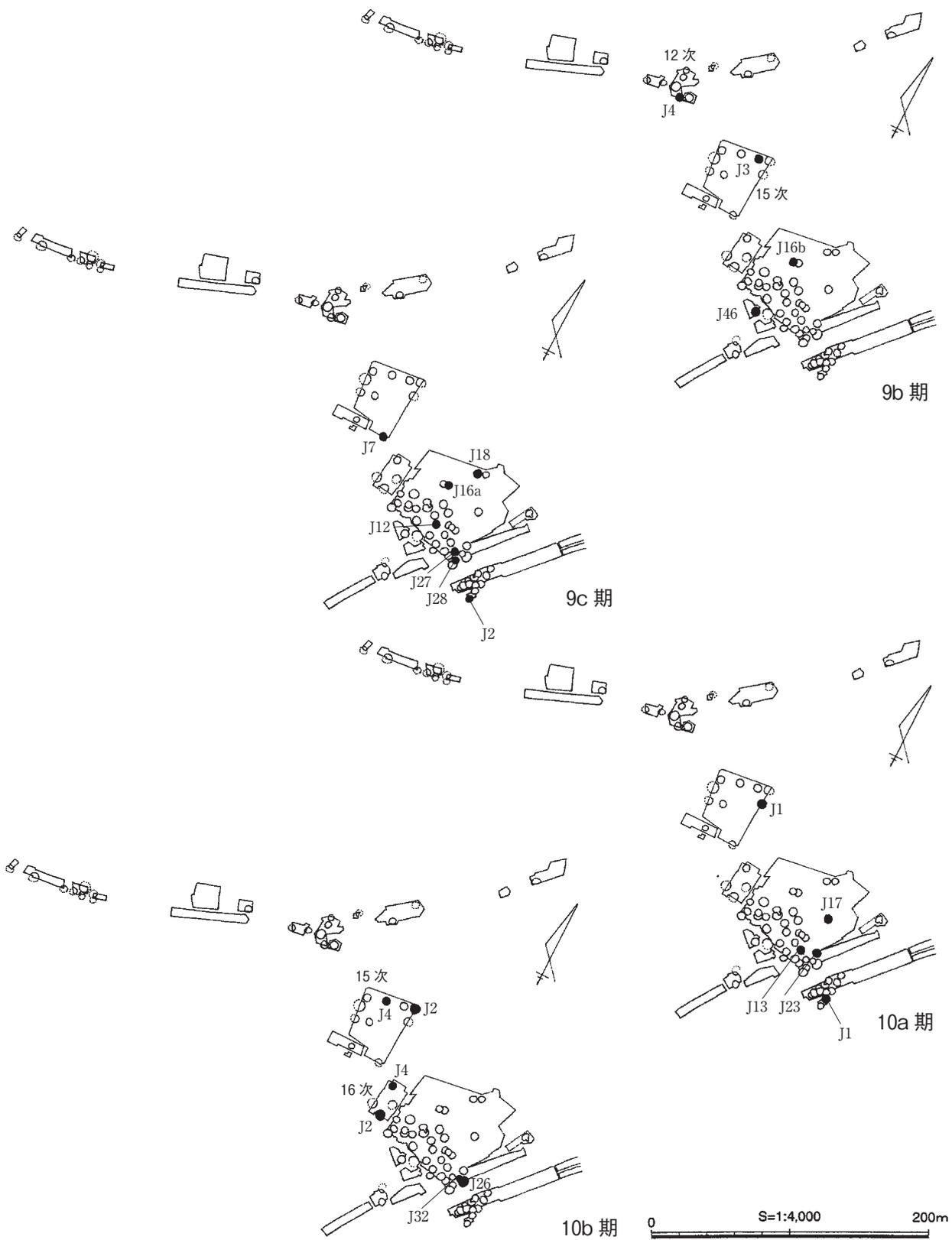


図22 弁財天池遺跡における時期別住居分布図(2) (S=1/4,000)

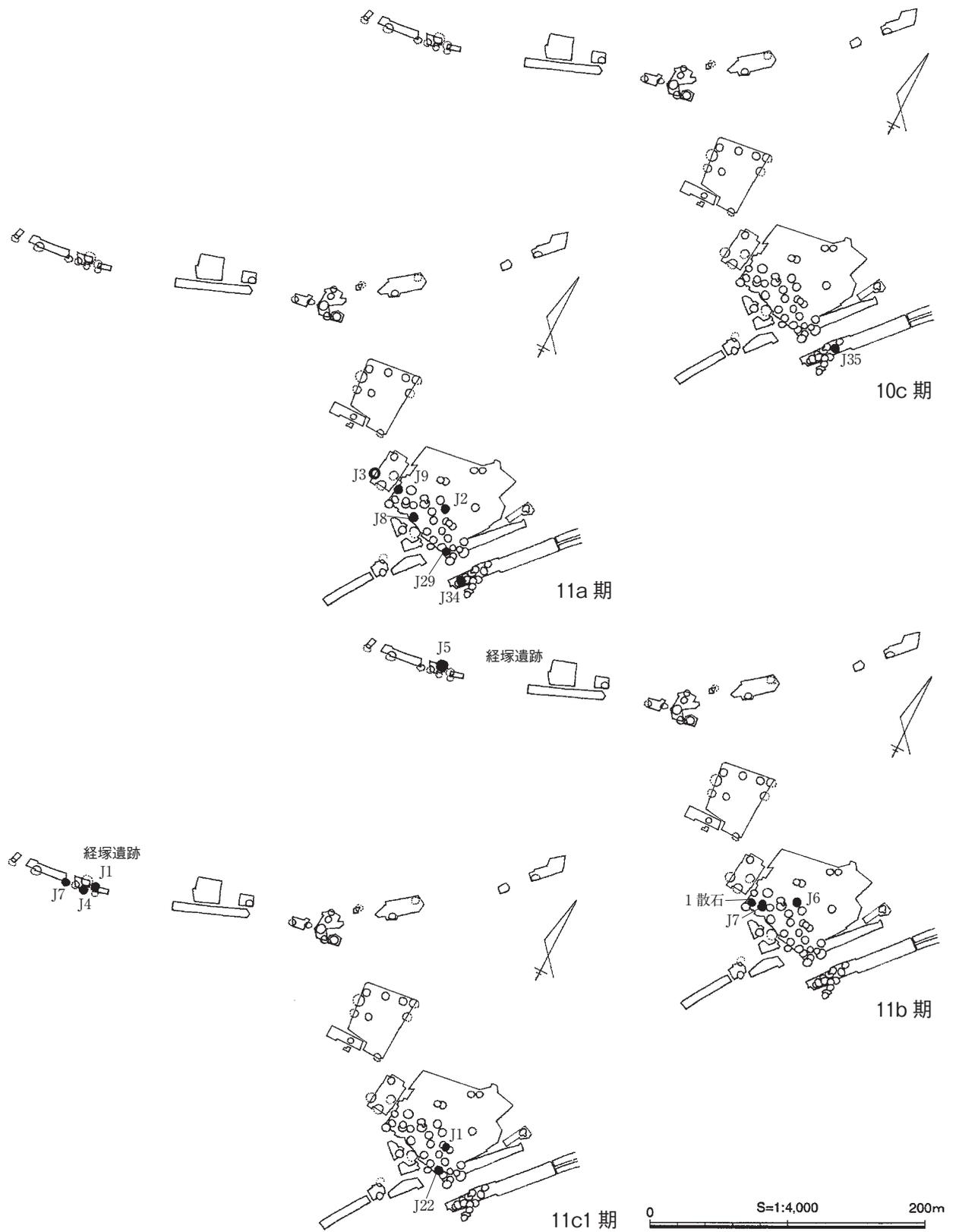


図23 弁財天池遺跡における時期別住居分布図(3) (S=1/4,000)



図24 弁財天池遺跡における時期別住居分布図(4) (S=1/4,000)

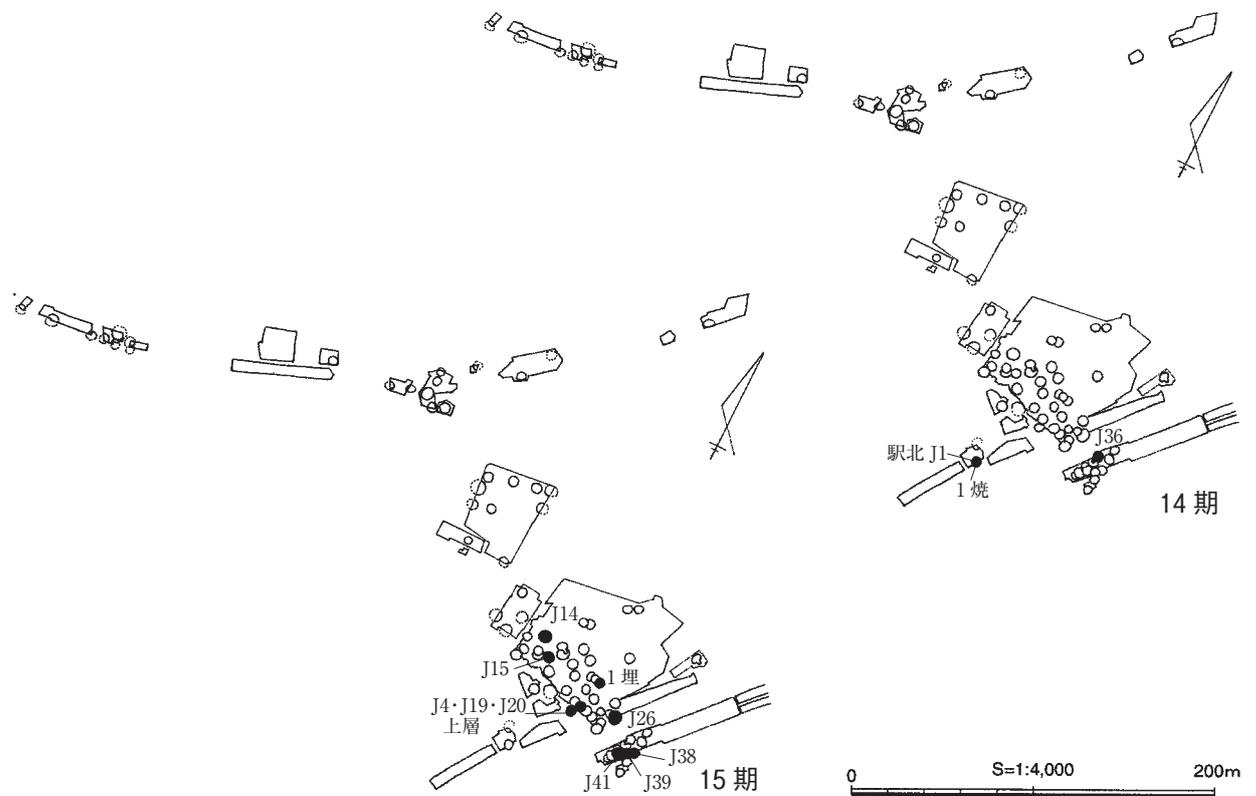


図25 弁財天池遺跡における時期別住居分布図(5) (S=1/4,000)

住居が集中する傾向がさらに強まり、6軒の住居が点々と分布しており、一時的には、住居は一定の距離を保ちつつ環状に分布していた可能性はある。

ところが、11b期には様相は変化し、東側で住居軒数が減少、4軒の住居が認められる一方で、弁財天池遺跡の中心から離れた西側の経塚遺跡において住居が確認されるようになる。11b期以降は、弁財天池遺跡のなかでも2次調査区を中心とした東側の比較的限られた場所を中心に住居が分布すると同時に経塚遺跡においても住居の分布が確認できるようになり、12b・c期までは、やや離れた両方で住居が営まれる。このあいだも弁財天池遺跡では住居数は一定で変化するわけではなく、11c2期に5軒とやや軒数が増加するものの、基本的には2軒前後の住居からなる景観で推移する。そして、他の検討事例と同様、12b・c期には住居数が急激に増加するとともに、住居の分布範囲もやや拡散する。

13期に入ると弁財天池遺跡では、13a期に柄鏡形住居1軒が、13b期に柄鏡形敷石住居が1軒が分布、続く14期にも2軒の住居が分布する。15期には住居軒数が増加するものの、一部で3軒の重複関係が確認されることや、15期の土器の時期細別に課題が残されていることなどから、一時期に機能していた住居はさらに少なくなる可能性が高い。

以上のように弁財天池遺跡周辺の様相は、北側を中心に住居が分布する7b期以前から8a期までと、南東側に分布が広がり始める8b期、住居の分布範囲がより広範囲に及ぶものの分布の主体が南東側となる9a期から10b期まで、住居分布が南東側だけに限定されるようになる10c期か

ら11a期、さらには西側に離れた経塚遺跡側で居住が開始される11b期以降、再び東側の限られた場所に住居が点在する13a期以降というようにいくつもの画期が介在する。南東側に住居分布が偏在する11b期から12c期のあいだにおいても、12b期以降の住居数の増加は、他の検討事例同様、それ以前の時期と比較するとかなり大きい特徴である。

#### (4) 土器の細別時期別にみた集落景観

以上、主要10遺跡において、土器の時期細別に沿った住居分布を検討してきた。ここで、その結果をまとめておくことにしたい。

まず、今回検討した各集落遺跡において住居が確認できるようになるのは、概ね8期前後からである事例が多く、5期、6期から居住が開始される事例は少ない。これと関連する特徴として、7・8期以降に居住が開始された遺跡においては、途中断絶を挟みつつも、居住の中心となる場所が大きく変化する事例は少なく、同じような場所に居住の痕跡が累積されつつ中期末葉を向かえる事例が多い（八ヶ谷戸、塚山、市谷甲良町・加賀町二丁目、三栄町の各遺跡）。対して、居住の開始時期が古い遺跡では、居住の中心となる場が途中で大きく移動する傾向がある。例えば5c～6期に住居が営まれるようになる鶯谷遺跡では、8b期までは同じ場所に居住の痕跡が累積するものの、9a期以降は居住の中心がやや北に移動する。明治薬科大学遺跡でも7a期に居住が開始されるが、当初からの場所に住居が累積して残されるのは10a期までであり、10b期以降は居住の中心が移動する。弁財天池遺跡においても同様で、10b期と10c期を境に居住地として利用される場所が移動している。一見、古い時期の住居が確認される集落遺跡は、集落として利用された期間、集落の継続期間が長いと評価されがちであるが、詳細に検討すると、同じ場所が居住の中心として利用され続けているとは言えない。

またいずれの集落遺跡においても、1～2軒の住居が点在する景観から、集落形成が開始されていることは改めて確認しておきたい。その後、途中、住居数の増減を含むものの、11a期前後までは1～2軒の住居分布で推移する事例が多い。しかも集落形成当初は、一定の距離をおいて対峙するような場所に交互に、あるいは対峙するような場所に各々1～2軒の住居が分布する状況が一般的である。

各集落遺跡においては、一時的に住居軒数が増える時期が認められる。大まかな傾向として11b期あるいは11c1、11c2期に、それ以前に比して住居数が倍増する傾向が窺えるものの、途中、住居数が増減する時期は、各集落遺跡によって微妙に異なる。例えば、落合遺跡では9a期、明治薬科大学遺跡では9b期、10b期、11c2期、弁財天池遺跡では9c期から10b期、11c2期、扇山遺跡では11b期、八ヶ谷戸遺跡では11c1期、鶯谷遺跡では11c2期という具合で、各集落遺跡により時期に違いがあるものの、ある時期には、住居が環状に点在するような時期が存在した可能性はある。しかし、AMS<sup>14</sup>C年代測定値に基づく近年の研究成果からは、8a期、8b期が70年、9a期、9b期が80年という具合に、前後の時期に比較して約2～3倍存続期間が長い可能性が指摘されており、8a期から9b期において住居数が増加する現象は、見かけ上の現象に過ぎず、同時期存在の住居はさらに少なくなる可能性がある。対して、9c期、11c1期、11c2期は20年、他の時期はほぼ30年といった存続期間が想定されており、明治薬科大学遺跡に見られた10b期、11c2期、弁財天池遺

跡で見られた9c期から10b期、11c2期、扇山遺跡で見られた11b期、八ヶ谷戸遺跡で見られた11c1期、鶯谷遺跡で見られた11c2期などに見られる住居の増加は、同時期存在の住居自体が増加したことを示している可能性が高い。

ここでは、各集落遺跡では、見かけ上住居が増加したと考えられる時期を除き、9c期から11c2期のあいだに一時的に住居軒数が増加する時期が存在するものの、その時期は集落によって微妙に異なることを確認しておく。このことは、一定の場に住居が集中する要因を考える上できわめて重要である。各集落遺跡において住居数の増減時期が異なるということは、住居数の増減の要因は自然環境の変化等といった大局的なひとつの要因によるのではなく、各遺跡ごとにその背景が異なっていたことを示している。おそらく、各集落遺跡の立地、環境、生業、居住集団のあり方など、多様な要因に左右された結果であることが想定される。住居数の増減については、各集落遺跡ごとに、多様な背景を探る手段を検討していくべきであろう。

対して、12b期に見られる住居数の急激な増加は、いずれの集落遺跡においてもほぼ共通しており、同時に12a期以前の住居跡が環状に累積してきた分布の内側に集中したり、あるいはその外側に大きく外れた分布を見せたりと、12b期の画期は武蔵野台地東辺地域で共通したかなり大きな画期である。

12b・c期の住居数の増加についても、先に参照したAMS<sup>14</sup>C年代測定による近年の研究成果を参照すれば、12b・c期は前後の時期に比較して、2～3倍の長い時間継続したことになり、その分多くの住居が残される結果となる。大橋遺跡の検討ではこの間に9回以上の住居の建替えサイクルを含んでおり、同時期存在の住居のまとまりを示す1フェイズの時間幅は、10～15年ほどという興味深いデータが提示されている [小林2003]。とすれば、12b期とした住居分布には5～8回のフェイズが、12c期の分布図には4～7回のフェイズが、それぞれ重複した姿が表現されている可能性が高い。12b・c期に住居同士が複雑に重複する原因もある程度納得できるところであろう。純粹に割り算によって、同時期存在の住居数を推定することはできないが、いずれにしても、土器の細別のみで比定された住居数よりも、同時に機能していたであろう住居数は圧倒的に少ないことは間違いなく、同時期存在の住居数自体はそれ以前と変わらない可能性がある。

その一方で、12a期以前の住居分布が、それ以前の居住痕跡が分布する場所のなかで、一定の距離を保ちつつ対峙するような位置を移動しながら累積されてきたのに対して、12b期以降の住居分布はそれとは無関係に、無秩序に広がるという分布上の特性は極めて特徴的である。また、個々の住居の掘り込み自体が以前の住居に比較して貧弱となることから、前後の時期に比較して1軒の住居の機能した時間が短く、継続的か断続的かは別としても、他の時期に比較して同じ場所が繰り返し利用される頻度が高くなったといえるだろう。

以上のように、最終的に住居跡が環状に分布するよう見える各集落遺跡は、土器細別時期ごとにその分布と変遷を辿った限りに<sup>(6)</sup>においても、集落形成当初の軒数は限られており、その後の各時期も同時期に存在したと考えられる住居軒数は少なく、一時的景観は住居が環状に分布する姿ではない。また、集落形成当初から一貫して一定の住居数、住居配置で変遷を続けてきた事例は皆無である。途中、住居数は増減を繰り返しつつ、一時的景観は、ある程度の距離を保ちつつ1・2軒、あるいは数軒の住居が点在する姿が基本であり、それらが居住の場を微妙に替えつつ重複した結果と

して、環状集落跡が形成されたことは了解されていだろう。さらに、途中、時期によっては住居分布の基本的なあり方が大きく変化することや、1軒の住居も分布せず、居住の場として断絶を挟む場合すらある。ある時点で構築された墓坑に後の住居が重複する事例などは、そこに墓を営んだ人々と、住居を営んだ人々の間には、明確な断絶があると考えた方が妥当なのであり、集落の形成当初から継続して居住が営まれたとすべき事例は、今回の検討事例のなかから見出すことはできなかった。

### ③……………住居施設の変遷から見た集落の変遷

ここでは、前項までの検討とはやや視点をかえて、居住の継続性・断絶性を検討するひとつの素材として、各集落遺跡において検出された個々の住居の形態に着目した検討を行っておきたい。具体的には、周溝の有無、支柱穴配列、炬形態に着目し時期別に集計を行った。検討にあたっては、複数回の住居回数が認められる住居跡については、住居回数1回ごとに分解したうえで分類を行った。そのため、報告されている住居跡数よりも総計の住居数が多くなっている。その一方で、複数の住居回数を数える住居の場合、より古い生活面に残された施設は破壊されている場合が多く、所産時期、形態分類ともに分類不明となる軒数が極端に多くなった。そのため、今回のデータは必ずしも統計的な検討に十分耐え得るデータとはなっていない可能性があるが、各集落遺跡における住居形態の大まかな変遷を読み取ることに主眼を置くことにする。

#### (1) 周溝の有無

まず、周溝の有無については、概ね中期中葉には周溝を持たない住居が多く、10a・10b期以降、逆転、周溝を持つ住居が増加する。しかし中葉の住居すべてが周溝を持たないわけではなく、いずれの集落遺跡においても、各時期少なからず両者が並存するのが実態である。そして、12b期には一転し、再び周溝を持たない住居が大半を占めるようになる。なお、9期、11期、12期には、一部の集落遺跡で壁柱穴が廻る住居も確認されている。

周溝の有無が住居の構造上の差を表しているとするれば、主に壁面構造の差を反映しているものと考えられる。周溝が無い場合、壁面は素掘りのまま露出していたと考えられる一方、周溝や壁柱穴が検出される場合は、壁面を押さえ補強する施設の存在が想定される。もちろん我々が堅穴として認識する掘り込みの外側に周堤状の施設が設けられていた可能性もあり、一概には言い切れないが、周溝を持つか持たないかによる、住居壁面の構造上の差は意外と大きく、場合によっては住居自体の耐用年数にも大きな差が生じるのではないかと考えられる。いずれにしても、同一集落内の同一時期に、周溝を有する住居と周溝を持たない住居が混在することは、壁面の構造が異なる住居が、同一居住空間に混在していたと言えるかもしれない。

#### (2) 支柱穴配列

つぎに、支柱穴配列を見ると、いずれの遺跡においても同一時期に複数の住居が検出された場合、4本支柱穴の住居、5本支柱穴の住居、両者が混在する状況であり、この両者を中心に変遷する。

基本的には4本主柱穴の住居が各時期を通じて営まれる遺跡が多い。唯一例外が三栄町遺跡で5本主柱穴の住居のみが継続しているように見えるが、三栄町遺跡は統計母体数が少ないため詳細は不明とせざるを得ない。

なお、同一の集落遺跡内においても、4本主柱穴の住居が連続する時期と、5本主柱穴の住居が継続する時期が分離する事例もある。例えば、扇山遺跡では4本主柱穴の住居を中心に変遷し、5本主柱穴の住居が認められるのは、11b、11c1期に限定される。鶯谷遺跡ではやはり4本主柱穴の住居を中心に変遷し、5本主柱穴の住居は8b期、11c2期、12b期から13a期にのみ並存する。落合遺跡ではやはり4本主柱穴を中心に変遷し、5本主柱穴の住居は7a期、9a期から9c期、11a期から11c1期にかけて並存する。明治薬科大学遺跡では7b期から13b期にかけて4本主柱穴の住居が構築される一方で、8b期から9b期、10b期から11a期、11c2期から13a期には5本主柱穴の住居が断続的に構築されている。さらに、弁財天池遺跡では5本主柱穴の住居は8a期から12b期にかけて構築されている。というように、5本主柱穴の住居は、4本主柱穴の住居と並存する時期が比較的限られる集落遺跡と、比較的長い時期にわたり並存する集落遺跡があり、並存する時期は、各集落遺跡ごとに違いがある。

6本主柱穴については、八ヶ谷戸遺跡において8b期以降断続的に営まれるのに対して、市谷甲良町・加賀町二丁目遺跡では、7a・7b期と11a期のみ、扇山遺跡では10a期、11b期、11c1期のみ、落合遺跡では9a期と10a～10c期のみ、塚山遺跡では9c期と12b・12c期のみ、鶯谷遺跡では12a～12c期のみ、明治薬科大遺跡では9b期から10b期、12a・12b期というように、各遺跡により時期差はあるものの、やはり限られた時期にのみ出現している。対して弁財天池遺跡では8b期から11c2期にかけて断続的に認められる。

以上のように、主柱穴配列については、各遺跡ごとに大まかな傾向性を認めることができる。重要な点は、ひとつの集落遺跡において同じ主柱穴配列の住居のみが各時期を通じて構築され続けるわけではないこと、同時期に存在したと考えられる住居に限定してみても、同じ主柱穴配列の住居だけで占められるといった時期がほとんどないことである。言い換えれば、各集落とも、異なる主柱穴配列の住居が同時に存在する時期が多い一方で、5本、6本といった主柱穴配列の住居は、かならずしも継続して構築されることはない。

主柱穴配列の違いが何を示しているのかは難しい。4本主柱穴配列の住居の竪穴は正円形に近い掘り込みである場合が多いのに対して、5本、6本、7本主柱穴の住居の竪穴は長楕円形を呈する掘り込みである場合が多く、両者を比較すれば、後者で竪穴がより広くなる傾向がある。とすれば、主柱穴配列の違いは単に竪穴の掘り込みの広さに対応するための手段に過ぎない可能性がある。5本主柱穴の住居や6本・7本主柱穴配列の住居が増える時期は、前後の時期に比較して、1軒当たりにより広い居住スペースを確保する必要が生じた可能性が考えられる。しかし各集落遺跡によって出現時期に違いがあることから、より広い居住スペースが必要となった背景は、各集落ごとに事情が異なると言える。

なお、円形の掘り込みのほぼ中心に1本の主柱穴が検出される住居、いわゆる「阿玉台系」の住居が少数であるが確認されている。扇山遺跡、落合遺跡で検出されたものは出土遺物が少なく、厳密な時期比定はできなかったが、鶯谷遺跡では7b期に1軒、弁財天池遺跡では7b期に2軒、8b

期に1軒が確認されている。対して弁財天池遺跡では8a期に阿玉台Ⅲ式土器を炉体に転用した「勝坂系」の住居も確認されており、阿玉台系集団の西への進出時期と勝坂式系集団との関係を考えるうえで検討を要する。

また、全ての事例を通じて、主柱穴配列が不明である住居が12b・c期以降急増する。調査では屋外炉と屋外埋甕だけが、あるいはそれらを取り巻く柱穴だけが検出されるなど、いわゆる「加曽利E3」面想定住居〔宇佐美1998a〕と仮称したものである。これらの住居は、竪穴の掘り込みが浅いだけでなく、主柱穴配列が不規則になるとともに、個々の柱穴も細く浅いなど、12a期以前の住居に比較して、住居施設が急激に貧弱化しており、1軒あたりの耐用年数もかなり短いものと想定される。いずれの集落遺跡においても12b・c期には住居軒数が急激に増加し、住居同士に複雑な重複関係が認められる事例が多くなる背景には、土器細別段階としての12b・c期の時間幅が長いことに加え、個々の住居の構築がより簡易になるといった現象が重なったことに主な要因があると考えられる。それら住居が複雑に重複する原因については、同一集団による継続的な建替えによるものであるのか、断続的な建替えが重複した結果であるのか、別集団の土地利用の累積が複雑に重複したものなのかには判断できない。ただし、12a期以前から継続する同一の集落遺跡のなかでも、12b・c期の住居分布は12a期以前の住居分布とは明らかに様相が異なることは確かで、12a期以前の居住とは断絶を挟んだ重複関係にあると見てよい。

### (3) 炉形態

炉形態は、『シンポジウム縄文集落研究の新地平』で提示された小葉による分類〔小葉1995a〕に沿って分類を行った。大きく括れば、埋甕炉(Ma, Mb)と石囲埋甕炉(SMa, SMb, SMc)、石囲炉(Sa, Sb, Sc)、添石炉(So)、土器片敷炉(Da, Db, Dc)、地床炉(J)であるが、地床炉以外は、土器の転用状況や規模を考慮し細分されたものである。

武蔵野台地東辺においては、おおまかな傾向として、埋甕炉→石囲埋甕炉→石囲炉へといった変遷が認められ、これに地床炉が伴う。埋甕炉でも主流をなすのは、口縁部から胴部中位を転用したMbで、胴部中位のみを転用するMaは少なく、今回検討した遺跡では塚山遺跡や鶯谷遺跡で数例確認できたのみである。石囲埋甕炉では、埋甕に接するように石が配されるSMaの出現がより早く、大型の石囲炉の中心に埋甕が据えられるSMbの出現はやや遅れる傾向があるもの、その変遷には明確な画期があるわけではなく、かなり暫移的である。対して、石囲いの長辺片側に接するように埋甕を埋設するSMcについては、11c期から12期に限定される。土器片敷炉、土器片囲炉は、11c2期以降出現し、12期に顕著となるなど、採用される時期が限定される形態もある。

遺跡ごとに比較してみると、石囲埋甕炉(SMa, SMb)の割合は、他の遺跡に比べて多摩川寄りに位置する明治薬科大学遺跡と弁財天池遺跡において圧倒的に多く、出現時期についてもこの2遺跡が他の遺跡に比べて圧倒的に早い。SMaは、明治薬科大学遺跡では8a期に、弁財天池遺跡では8b期に出現、他の遺跡では少数ながら10期以降にようやく認められるようになる。SMbは、明治薬科大学遺跡、弁財天池遺跡、塚山遺跡で10b期に出現、鶯谷遺跡で10c期に出現するものの、八ヶ谷戸遺跡や扇山遺跡、落合遺跡では11c1期以降にようやく出現する。このような石囲埋甕炉の採用に見られる時期差は、石囲炉の浸透具合に左右されているものと考えられる。というのは、



②扇山遺跡

時期	総数	周溝の有無			主柱穴配列								炉の形態																
		無	有	不明	3	4	5	6	7	8	他	不明	Ma	Mb	Mc	SMa	SMb	SMc	Sa	Sb	Sc	So	Da	Db	Dc	J	不明		
中葉	3	3					1					2																	3
9b	1	1				1								1															
9c	0																												
10a	3	1	2			1		2						1	1													1	
10b	2	2				1	1																					2	
10c	0																												
11a	0																												
11b	6	4	2			2	1	1						1														3	2
11cl	3	3					1	2							1			1										1	
11c2	2	2				2												2											
12a	1	1				1									1														
12b	9	7	2			1	4																				4	5	
12c	5	2	1	2		1	1																1	1	1	1	2		
13a	0																												
13b	1	1				1																			1				
不明	5	2	3			4	1																						5

\*中葉の炉形態不明は、阿玉台系住居

③落合遺跡

時期	総数	周溝の有無			主柱穴配列								炉の形態																
		無	有	不明	3	4	5	6	7	8	他	不明	Ma	Mb	Mc	SMa	SMb	SMc	Sa	Sb	Sc	So	Da	Db	Dc	J	不明		
7a	1	1					1																					1	
7b	1	1													1														
8a	2	2				2									1														1
8b	3	2	1												2														1
9a	9	5	3	1		2	2	1						5													1	3	
9b	4	2	2				3							2															2
9c	4	2	2			2	2							4															
10a	2	1	1			1	1							1															1
10b	2	1	1			1	1							1															1
10c	2	1	1			1	1							1															1
11a	3	3				2								2															1
11b	6	1	3	2		2	1												3										3
11cl	2	1	1			1									1														1
11c2	3	3				1	1										1	1										1	
12a	2	2				1	1							1		1													
12b	16	15	1				2	1						3														4	9
12c	1	1				1																							1
不明	36	9	16	11		12	9	3		1				4		1			2								4	25	

\*19, 20, 21, 30の最終形態の住居のみ未集計

\*8a期の炉不明は炉無, 9a期には壁柱穴1軒, 12b期には柄鏡形1軒含む。時期不明のうち1軒には炉無しの阿玉台系住居を1軒含む

④市谷甲良町・加賀町二丁目遺跡

時期	総数	周溝の有無			主柱穴配列								炉の形態																
		無	有	不明	3	4	5	6	7	8	他	不明	Ma	Mb	Mc	SMa	SMb	SMc	Sa	Sb	Sc	So	Da	Db	Dc	J	不明		
7a	1	1					1																						1
7b	1	1					1							1															
8a	0																												
8b	0																												
9a	0																												
9b	0																												
9c	0																												
10a	1	1																											1
10b	0																												
10c	0																												
11a	1	1					1							1															
11b	1	1																	1										
11cl	2	2				1													1										1





12b	18	8	9	1	10	4	3			1	3				2	2					5	6
12c	2	2			1	1									1	1						
13a	4	4			3	1					1				2						1	
13b	1	1	1		1					1								1				1
14																						
15	2	2			1					1												2
不明	65	22	16	27	1	26	13	2			23	2	4		2		5	2			33	17

⑩弁財天池遺跡

時期	総数	周溝の有無			主柱穴配列							炉の形態																
		無	有	不明	3	4	5	6	7	8	他	不明	Ma	Mb	Mc	SMa	SMb	SMc	Sa	Sb	Sc	So	Da	Db	Dc	J	不明	
7b	5		5				1	1	1		2							1			1					1	2	
7b~8a	3	3																									3	
8a	2	2				2						1									1							
8b	4	4			1	1	1				1				1				1								1	
9a	4	2	2			1								1					1								1	
9b	4	3	1			2	1	1			1		3								1						1	
9c	7	5	2			6	1						3		2												2	
10a	7	4	3		1	1	3	1					2		1											3	1	
10b	7	1	5	1		3	2		2				4		2	1												
10c	1		1			1									1													
11a	7	3	4			4		2							1				1							1	4	
11b	4	1	2	1			1	1	1										2							1	1	
11c1	5	2	3			2											1		1								3	
11c2	7	1	4	2				1	1						1	1											5	
12a	3	2	1			1	1												2								1	
12b	7	2	4	1		3	1												1							2	4	
12c	1	1																									1	
13a	1	1							1						1													
13b	1	1													1													
14	3	2		1		2																					3	
15	6	4	1	1				1																			2	4
16	1		1																								-	
不明	35	16	14	5		13	6	4	2	1			2						2							6	25	

\*7b, 8b期の柱穴その他は、中心1本柱の阿玉台系住居  
9c, 11a, 12b期には壁柱穴の住居あり、15基のうち2軒は環状に柱穴配置  
11c2期のうち、1軒は集石炉  
13a期は柄鏡形、13b期は柄鏡形敷石住居

(4) 住居施設の変遷からみた集落の継続性

以上のように、今回は、周溝の有無と主柱穴配列、炉形態の3項目について、各遺跡における変遷を整理し相互に比較を行った。その結果、武蔵野台地東辺として大まかな変遷の傾向性が認められる一方で、いずれの集落遺跡についても、特定の炉形態、特定の主柱穴配列の住居だけが継続して営まれる様相は確認できず、逆にひとつの集落遺跡においても住居の形態が大きく変化する画期が存在することが確認できた。さらに、同一集落遺跡の同一細別段階においても、異なる主柱穴配列や異なる炉形態の住居が並存することが一般的であることが確認できた。住居の構造に大きな違いが認められると想定される周溝の有無についても、同一集落遺跡の同一細別時期において、周溝を有する住居と周溝を持たない住居が混在する。同一細別時期において複数の住居が確認される場合、同一形態の住居のみで集落が構成される遺跡はないといってよい。

住居の形態が集団のあり方に規定される性格のもの〔小栗1995aなど〕であれば、住居の形態が大きく変わる時期は、各集落において居住する集団に何らかの変化があったということになる。土器の細別段階から見ると連続して営まれていたように見える集落跡についても、同一の主柱穴配

置や同一の炉形態の住居が途切れなく続いて構築され続けることはなく、そこには居住集団の入れ替えに近い事態を想定すべきであろう。このことから、最終的な形態としてひとつの環状集落跡に見える居住の痕跡群は、ひとつの集団が同一地点に住み続けた結果形成されたものというよりも、異なる集団が頻繁に出入りを繰り返し居住を営んだ痕跡が累積したものと考えの方が妥当である。

また、炉形態に着目した場合、武蔵野台地の東辺といった地域のなかでも、時期ごとには炉形態を共有するより狭い小地域差を抽出することができそうである。したがって、縄文中期の集落遺跡の検討にあたっては、ひとつの拠点集落跡、大規模集落跡における継続的な居住を前提とした議論を進めるよりも、一定の地域を想定しつつ、その内部で頻繁に行き来があるような、移動性に富んだ居住のあり方を想定するほうが、より妥当性が高いものと判断できる。

## ④……………大規模集落遺跡と小規模集落遺跡

### (1) 環状集落形成以前の様相から

ここでは検討の視点をやや広げて、今回具体的な検討事例とした集落遺跡のうちいくつかについて周辺遺跡の状況を合わせて確認しておく。というのも、②で確認したとおり、武蔵野台地で特定の場所に居住の場が累積するのは、おもに7・8～12b・c期であり、より古い段階の竪穴住居が確認される集落遺跡も、古い段階の住居は、それ以降の住居が環状に累積される場所とは微妙に異なった場所に残される事例が多いことなどから、ひとつの集落遺跡イコール当時のひとつの集落であることを前提とした検討自体に限界があると考えられるためである<sup>(7)</sup>。

例えば、塚山遺跡では8a期に3軒の住居が営まれるようになるが、神田川を挟んだ対岸に位置する鎌倉橋遺跡D地点、堂の下遺跡では、五領ヶ台Ⅱ式期から貉沢式期の遺物集中、焼土跡が検出されており、何らかの居住の痕跡と考えられる。また、堂の上遺跡では、6b～7a期の所産と考えられる炉をもたない住居1軒が検出されている。さらに神田川をやや上流に遡った高井戸東遺跡では、近隣第二遺跡で6b期の埋甕炉を有する住居1軒が検出されている。さらに上流に位置する西ノ原遺跡でも、5c期の埋甕炉を有し、柱穴が認められない住居1軒が検出されている。というように、塚山遺跡の地に住居が集中して残されるようになる以前、五領ヶ台Ⅱ式期から7a期にかけては、主に神田川の対岸、北岸に一定の距離をおいて単独で住居が点在する様相が窺える<sup>(8)</sup>。三栄町遺跡、市谷甲良町・加賀町二丁目遺跡周辺では、三栄町遺跡に近接する四谷三丁目遺跡で五領ヶ台Ⅱ式期の小竪穴1基が検出されているほか、神田川沿いに位置する西早稲田三丁目遺跡では、前期末葉の小竪穴1基のほか、前期末葉から五領ヶ台Ⅱ式期にかけて集石、遺物集中が数箇所検出されるなど、環状集落跡に居住の場が累積される以前の土地利用が周囲に広く点在している様相が判明している。

このように、環状集落跡として残された場所に居住痕跡が累積して残されるようになる以前の生活痕跡は、周囲に広く点在しており、広範囲に点在して営まれた居住のあり方が、なぜ特定の場所に累積するように変化するのか、その要因の解明こそが、環状集落跡形成の要因を解く鍵になると考えられる。

また、7b期以降に住居が営まれるようになるハヶ谷戸遺跡の周辺では、西に近接する外環もみじ山遺跡において、8a期の竪穴状遺構（阿玉台系住居）が1軒検出されている。同じ時期にハヶ谷戸遺跡では、勝坂系の埋甕炉を有する住居2軒が営まれている。また、扇山遺跡の周辺では、石神井川のやや上流南岸に位置する葛原A遺跡で、中葉7b期から9期にかけて6軒の住居が、溜淵遺跡で9期の住居1軒が確認されているほか、対岸の川北遺跡では5b期の住居1軒が検出されている。下流に向けては、池淵遺跡で8b期から9期の住居2軒、貫井二丁目遺跡では8期の住居1軒が、支流の中新井川沿いに位置する中村南遺跡で6b期から8b期の住居7軒が調査されている。葛原A遺跡、中村南遺跡ともに中葉の住居がまとまって調査されているが、土器の細別時期から見る限り、同時期の住居は1～2軒程度であることから、石神井川流域では、中葉までは1～2軒程度の集落が一定の距離をおいて流域沿いに点在する景観が展開していたものと考えられる。中期中葉においても、ある時期に限定して居住の場として利用される場所と、前後の時期も含めて繰り返し居住の場として利用される場所とがあり、両者の差が生じる原因を探ることも、環状集落跡の形成要因を説明するために重要な視点となろう。

このようにみると、特定の場所に居住痕跡が累積して残される要因、すなわち環状集落跡が形成される要因については、環状集落跡形成以前の土地利用が周囲にどのように展開していたのか、また環状集落跡が形成される期間においても、その一方に存在する短期的（単期的）な集落がどのような場所に残されているのか、その様相はどうかを抑えたいうで検討する必要がある。しかも、②で検討したとおり、特定の場に住居が累積し始める時期は、集落遺跡により、地域により差があるため、環状集落形成の要因は、いずれの集落遺跡においても共通した事情によるものではなく、各集落遺跡と周辺遺跡の実情に即して説明していく必要がある。そのためには、環状集落の周囲に広がる多様な土地利用の痕跡について広く統一的な視点・方法のもとで検討していく必要がある。

## (2) 中期末葉の様相解明に向けて

環状集落跡が終焉を迎えるとされる12b・c期から中期末葉の様相については、今回検討した10遺跡において、いずれも共通した様相を確認することができた。すなわち、12a期以前の住居分布とは、まったく違った原則のもと、それまでの居住痕跡が環状に累積してきたことを無視するような分布状況を示す。と同時に、環状集落跡として把握されている遺跡以外の場所において住居跡が検出される事例も急増する。

例えば、鶯谷遺跡が位置する渋谷川流域では、鶯谷遺跡で住居軒数が急増する12b期には、やや上流の西岸に位置する神宮前一丁目遺跡において12b期の住居1軒、12cの住居1軒のほか、12b・c期に残された焼土跡2基、墓坑と考えられる2基の土坑が検出されている。また渋谷川の谷頭に位置する千駄ヶ谷五丁目遺跡においても12b期の住居1軒が、内藤町遺跡Ⅱ地点においても12b期の住居1軒が検出されるなど、12a期以前の土地利用が希薄な場所にも住居が分布するようになる。

弁財天池遺跡では、12b・c期には住居数が増加、13a期、13b期に住居数は激減する。これと同時に清水川の谷筋をやや下った対岸に位置する寺前東遺跡において、12bあるいは12c期の住居2軒、13期の柄鏡形住居1軒が検出されているとともに、その対岸に位置する和泉駄倉遺跡におい

でも13期の柄鏡形住居1軒が検出されるなど、やはり12a期以前の土地利用が希薄な場所において住居が営まれるようになる。市谷甲良町・加賀町二丁目遺跡周辺では、西側に入り込む白鳥川の流域において、中期末から称名寺I式期の土器片が出土しているほか、やや上流に位置する喜久井町遺跡では、13a期以降、多数の住居が重複して営まれるようになるなど、やはり、それ以前には土地利用が希薄であった場所に住居の分布が広がる。

したがって、12b期以降の時期様相は、いわゆる環状集落跡のみを対象とした検討だけでは、時期様相の把握が困難である。これまでも触れてきたように、12a期以前の土地利用痕跡に重複して住居が営まれる場所でも、以前の住居分布とは大きく様相を異にするようになる。とともに、それ以外の場所にも住居が点在する傾向が強いということは、12a期以前の居住痕跡との重複は偶然の産物である可能性が高い。

環状集落形成時期とその要因については、各集落遺跡で形成開始の時期が異なることから、各集落遺跡と周辺の様相の検討を進めたいうえで、各集落遺跡ごとにその背景を探っていく必要がある一方、12b期以降、環状集落跡におけるあり方とその周囲における住居分布の散在傾向は、各遺跡、各地域ともに共通する現象であることから、まずは共通する要因を探っていく必要がある<sup>(9)</sup>。

このように大規模環状集落跡の成立過程や終焉の様相、それぞれの要因を検討する際は、周囲に広がる小規模集落の存在にも十分注意し、そのあり方を整理したうえで検討していく必要がある。そもそも、ひとつの集落遺跡イコール当時のひとつの集落との考え方は、調査する側の便宜的区分に過ぎない。我々が認識しているひとつの集落遺跡のなかに、当時のひとつの居住域としての土地利用全体が納まっている保障はどこにもない。

## まとめ——一時的集落景観の復元から見た集落研究の課題

本稿は、武蔵野台地東辺に位置する主要集落遺跡について、一時的景観の復元とその変遷を検討することを目的としたものであった。しかし、今回の検討はあくまで土器の細別時期に則って、住居分布の変遷を整理できたに過ぎない。そのため、提示した分布は各細別時期の存続期間のあいだに営まれたすべての住居が示されていることになる。すでに繰り返し指摘されているように、一軒の竪穴住居の存続期間に比べると、土器の細別段階の時間幅の方がまだまだ長いことを考慮すれば、今回提示した各段階の住居分布はさらに細分されたかたちとなるはずであるし、そのあいだには土器の細別段階ごとの検討だけでは把握できない居住の断絶期間が含まれる可能性もある。

とはいえ、これまで環状集落とされてきた集落遺跡は、土器の細別型式に則って整理する限りにおいてさえ、一時的景観はきわめて散在的で、ほとんどの時期について1～数軒程度の住居が分布するような景観が想定された。逆に一時期の景観においても、住居が一定の距離を保ちつつ環状の分布を示す時期があるものの、それはむしろ限られた時期のみであり、ほとんどの大規模集落跡・環状集落跡は、1～2軒程度の住居が分布する一時的景観が、何度も繰り返し重複した結果として形成されたものであることが確認された。そして、環状集落跡の形成当初から終焉までのあいだには、住居数は増減を繰り返し、時には断絶を含む場合もあった。

また住居形態の検討からは、ひとつの集落遺跡においても、時期により支柱穴配列や炉形態に違

いがあり、時期によっては居住集団が入れ替わったり、異なる集団が同居するような事態が想定された。すなわち、大規模集落遺跡は、特定の集団が集落形成当初から何世代も先に及ぶような居住の継続性を見越して、グランドデザインを描き、森林を切り開き占地を決め、居住を開始し、何世代も前に定められた広場を中心に、継続して生活を続けた痕跡とは考え難い。とすれば、今まで当然のように扱ってきた集落の消長という考え方は一旦分解してみる必要がある。何式期から何式期にかけて営まれた集落と、何式期までしか営まれなかった集落という分け方にどれほどの意味があるのか。例えば、中期後葉まで住居が認められる集落跡と末葉まで住居が認められる集落跡との違いは、それぞれの集落跡の質的な差を示しているのではなく、中期末葉の土地利用のあり方が後葉までのそれとは異なるということを示しているのであり、その要因を解明することこそが重大な課題であろう。

環状集落跡の形成要因、すなわち一定の場所に居住の痕跡が著しく重複する原因としては、「大きく見れば当時の集落の立地そのものは湧水点に規定されているのであり、とくに森林で覆われている地域では一度開地された場所を再度利用するほうが至便」であることや、環状を呈する要因については、「廃絶後の竪穴の大半が廃棄場所として有効利用されるという当該時期特有の土地利用のあり方に起因」するものとして、すでに見通しが立てられている[中山2007]。大規模集落跡と小規模集落跡の差、検出される住居数が示す差は、集落の機能差や質的な差ではなく、その場所が居住地として利用された頻度の差を示すものであれば、累積の最終形態である見かけ上の環状集落跡の姿から、あれこれ思案しても環状集落跡形成の要因を解決する糸口は見つからない。いずれの集落遺跡も一時的景観に大差がないとすれば、その累積の仕方こそが、中期の集落遺跡を特徴付ける最大の特徴なのであり、居住地として、単期的、一時的に利用されるに過ぎない場と、繰り返し利用される場とが存在する実態に対して、土地利用の頻度が生じる背景を探ることこそ必要なのである。その背景にこそ、居住地の立地環境や各時期の生業のあり方、さらには居住地としての選択基準が反映されているはずである。

領域論等も、上記の諸課題をクリアーにしたうえで議論されるべきで、見かけ上の大規模集落跡を中心に小規模集落跡を取り込むような領域論ではあまり意味がない。ひとつの大規模集落跡を拠点とし固定的な領域の形成を復元するような考え方にとらわれず、時期ごとに異なる広がりを持つ領域の一端が偶然重複・累積した場所がひとつの大規模集落跡として残されるといったケースも想定すべきであろう。時期ごとに異なる背景で形成された領域同士が複雑に重複する場と重複しない場所がある、その要因は何かといった視点も必要であろう。そのためには、これまでの一遺跡＝一集落といった偏見を排除することや、地形区分を問わずに調査対象を広げる努力も必要となる。

縄文時代中期の居住形態を解明するためには、これまでの大規模集落跡と小規模集落跡をめぐる議論に見られるように、移動か定住かといった議論にこだわるのではなく、様々な考古学的事象にみられる地域性がいかに形成されてきたか、さらにその前提となる集団の各地域への定着の実像を復元することが求められている。各集落遺跡における一時的景観の復元と平行して、具体的には、今回検討した炉形態、支柱穴配列のほか、出土土器の系統性などをあわせて検討することにより、ある集団が一定地域へ定着するあり方、定着の具体像を復元する作業こそが、縄文社会を復元するうえで大きな課題であるといえるのだろう。

## 註

(1)——これまでも、縄文中期集落研究グループ、セツルメント研究会メンバーで東京都内の中期集落遺跡のデータベース化を目指し、住居跡の集成作業を行ってきた。そのうち筆者は主に武蔵野台地東辺の集落遺跡の集成を担当しており、今回の検討はこの成果に基づくものである。

(2)——筆者はこれまでに武蔵野台地東部の集落遺跡における住居跡の集成を進めており、現在78遺跡、1,225軒分（一部後期初頭、前葉含む）のデータを集積している。しかし前述したとおり、ひとつの集落遺跡ですべての調査成果が公表されていない事例が多く、各集落遺跡単位での景観検討までは踏み込めないのが現状である。今回検討対象とした10遺跡は、そのうちでも比較的全体像が把握しやすいものを選択した。

(3)——「住居回数」という用語・概念は、八王子市宇津木台地区における遺跡調査・報告（八王子市宇津木台地区遺跡調査会1989ほか）のなかで考え出されたもので、その経緯等については、黒尾2008に詳しい。

(4)——小林謙一は、中期の竪穴住居について、住居基数と生活面の重複関係を整理し、その数量的推移や重複関係のあり方について検討を行っている（小林2009）

(5)——検討にあたっては、1995年に開催された『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平』で提示された「住居跡集成表」に基づき、住居跡の整理を行った。住居跡集成表は膨大な分量となることから本稿に掲載することはできなかったが、何らかのかたちで公表する機会を検討していきたい。

(6)——本稿は既刊の調査成果を見直すことを前提としたため、検討の素材は各報告書から得られる情報に限定された。したがって、土器の細別段階ごとの住居分布を示すことまでが限界で、本来の一時的景観を絞り込むための作業は行えていない。というのも、同一細別段階に比定される住居が、即すべて同時に機能していたとは考えられないためである。これは同一細別段階とした住居同士が重複する事例があることから了解されるであろうし、これまでも土器細別の時間幅に比較して住居の機能した時間幅の方が圧倒的に短い可能性が繰り返し指摘されてきているためである。したがって、厳密に集落の一時的景観を検討するためには、竪穴覆土における細別時期ごとの出土状態であるとか、遺構間の遺物接合の有無やその様相を整理することにより、出土土器により同一細別時期の所産と判断された住居のあいだにおける前

後関係の有無を含めて検討しなくてはならないが、本稿では果せていない。

(7)——中期前半の集落遺跡のあり方については、すでに中山真治が、野川、矢川流域の遺跡を中心に検討を加えており、1～2棟ていどの集落景観が普遍的であったことを指摘している（中山2006）。

(8)——神田川の最上流部の井の頭池周辺では、中期中葉から後葉、後期初頭の住居群が集中して残されているものの、中葉と後葉では住居分布が微妙に場所を変えていたり、中葉の住居分布のなかでも、勝坂系の住居跡と阿玉台系の住居の分布が微妙に場所を違えて分布したり、中葉では住居軒数のわりに集石遺構が多い傾向もあるなど非常に興味深い状況が確認されている。その具体的様相については今後の検討課題としたい。

(9)——中期末以降、後期にかけては、小支谷などの低地への進出傾向が強まるとともに、住居のほかにも明らかに貯蔵施設と考えられる土坑を伴うような居住痕跡が確認されている。本稿では詳細に触れる余裕がないものの、渋谷川の谷筋では、内藤町遺跡に隣接する渋谷区千駄ヶ谷大谷戸遺跡において、柄鏡形住居2軒を含む後期前葉の住居3軒や貯蔵穴と考えられる円形土坑4基が検出されている。また、三栄町遺跡からやや東に離れた四谷一丁目遺跡では、外堀にそって江戸時代以来厚く堆積した盛土の下から、低地上に立地する後期前葉の柄鏡形住居、地点貝塚を伴う土坑、貯蔵穴、墓坑などが検出されている。なお、市谷加賀町二丁目遺跡では、台地上に後期の住居が残される一方、西側に位置する白鳥川の谷筋内部に位置する東円寺墓所跡からは、掘之内式期の貯蔵穴と考えられる土坑2基が検出されている。以上のように、後期前葉にかけては、土地利用の中心は台地上から低地へ進出する傾向が確認できる。

(10)——縄文中期の集落遺跡を検討するにあたって、移動か定住かの二項対立的な見方にとらわれることなく、一定地域への定着と、その実態を解明するといった方向で検討を進めていくことについて、基本的な考え方については、別稿ですでに触れたことがある（宇佐美2008）。また、土井義夫・黒尾和久両氏は、「調査資料のあり方は、比較的小さな規模の生活集団」が「比較的自由に、必要に応じて一定領域を点々と居住地を変えつつも、全体として一定の範囲に『定着』しているような姿を示唆しているように思え」として、すでにいち早くから、「定着」の概念と基本的な検討の姿勢を示唆している（土井

---

1995, 土井・黒尾 2004)。

---

検討対象遺跡の調査報告書(図は各報告書から引用, 改変している)

---

- 練馬区教育委員会 1993『八ヶ谷戸遺跡』  
八ヶ谷戸遺跡調査会 1997『八ヶ谷戸遺跡第二次調査』  
共和開発株式会社 2008『八ヶ谷戸遺跡第三次調査—陽和病院内における調査—』  
東京医科大学 1982『扇山遺跡—石神井台・東京医大校地縄文遺跡—』  
練馬区遺跡調査会 1989『練馬区扇山遺跡調査報告書—第4次調査—』  
動坂貝塚調査会 1978『文京区動坂遺跡』  
新宿区落合遺跡調査団 2001・2002『東京都新宿区落合遺跡Ⅲ—第3～7次・9～12次発掘調査—』(第1～3分冊)  
テイケイトレード株式会社 2004『東京都新宿区落合遺跡Ⅳ 学校法人目白学園地点 第13次発掘調査』  
大成エンジニアリング 2010『東京都新宿区落合遺跡Ⅴ 学校法人目白学園地点 第14次発掘調査』  
杉並区教育委員会 1974『下高井戸塚山遺跡発掘調査報告書』文化財シリーズ11  
下高井戸塚山遺跡調査会・杉並区教育委員会 1988『下高井戸塚山遺跡』杉並区埋蔵文化財発掘調査報告第16集  
新宿区三栄町遺跡調査団 1994『東京都新宿区 三栄町遺跡Ⅵ』  
財団法人新宿区生涯学習財団 2003『東京都新宿区三栄町遺跡Ⅶ』  
財団法人新宿区生涯学習財団 2003『東京都新宿区 市谷甲良町遺跡』  
加藤建設株式会社 2000『市谷加賀町二丁目遺跡Ⅱ』  
大成エンジニアリング株式会社 2009『東京都渋谷区 鶯谷遺跡』  
共和開発株式会社 2009『東京都渋谷区 鶯谷遺跡第2地点—うぐいす住宅建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査—』  
世田谷区教育委員会・明治薬科大学遺跡調査会 2000『明治薬科大遺跡(世田谷区野沢1丁目35番の発掘調査記録)』  
狛江市教育委員会 1992『弁財天池遺跡』  
小田急小田原線増連続立体交差事業遺跡調査会 1995『小田急線遺跡調査報告書 小田急小田原線増連続立体交差事業に伴う遺跡調査』  
共和開発株式会社 2010『東京都狛江市 弁財天池遺跡—第15次発掘調査報告書—』  
共和開発株式会社 2010『東京都狛江市 弁財天池遺跡—第16次発掘調査報告書—』  
共和開発株式会社 2011『東京都狛江市 弁財天池遺跡—第17次発掘調査報告書—』

---

参考文献

---

- 石井 寛 1977「縄文時代における集団移動と地域組織」『調査研究収録』第2冊 港北ニュータウン遺跡調査団  
宇佐美哲也 1998a「加曾利E3(新)式期における居住痕跡の一樣相—原山遺跡第1地点 仮称「加曾利E3面」想定住居の検討—」『シンポジウム縄文集落研究の新地平』2 縄文集落研究グループ  
宇佐美哲也 1998b「武蔵野台地東辺における縄文時代中期終末の時期様相」『東京都新宿区喜久井町遺跡』早稲田大学・新宿区喜久井町遺跡調査団  
宇佐美哲也 2000「縄文時代前期末葉の居住痕跡—新宿区西早稲田三丁目遺跡第186号土坑の事例検討から—」『平成11年度新宿区遺跡調査研究発表会発表要旨』新宿区教育委員会  
宇佐美哲也 2003「淀橋台周辺における縄文時代中期集落の様相」『東京都新宿区三栄町遺跡Ⅴ』新宿区生涯学習財団  
宇佐美哲也 2005「住居形態と土器類型の違いにみる地域色—武蔵野・多摩地域を中心とした縄文時代中期の一事例から—」『Archaeo-Clio』第6号 東京学芸大学考古学研究室  
宇佐美哲也 2006「狛江市弁財天池遺跡における集落景観」『セツルメント研究』5 セツルメント研究会  
宇佐美哲也 2008「あらたな縄文時代史観を求めて—定住・移動・定着と土器型式をめぐって—」『Archaeo-Clio』第9号 東京学芸大学考古学研究室  
宇佐美哲也・石川季彦 1999「落合遺跡(9～12次調査)」『平成10年度新宿区遺跡調査研究発表会発表要旨』新宿区教育委員会  
宇佐美哲也・黒尾和久 2005「七ツ塚遺跡における縄文時代の土地利用変遷」『東京都日野市七ツ塚遺跡』15 日野市東光寺上第1土地区画整理組合・(株)第三開発

- 宇津木台地区考古学研究会 2008 「シンポジウム『縄文中期集落研究の新地平』記録集『論集宇津木台』第2集  
宇津木台地区考古学研究会
- 馬橋利行 1998「縄文時代中期前半の住居柱穴配置類型と規格性の抽出による集落分析法の一試論」『シンポジウム  
縄文集落研究の新地平』2 縄文集落研究グループ
- 大野尚子 2003「下野谷遺跡の住居時期および変遷復元のための検討基礎資料」『セツルメント研究』第4号 セツ  
ルメント研究会
- 金子直世 1991「縄文時代中期初頭の居住形態」『物質文化』第55号 物質文化研究会
- 木村 収 1992「群馬県域における縄文時代前期後半の居住形態」『研究紀要』10 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 黒尾和久 1988a「縄文時代中期の居住形態」『歴史評論』454号 校倉書房
- 黒尾和久 1988b「竪穴住居出土遺物の一般的なあり方について—吹上パターンの資料論的検討を中心に—」『玉口  
時雄先生古希記念考古学論文集 古代集落の諸問題』玉口時雄先生古希記念事業会
- 黒尾和久 1995a「縄文中期集落遺跡の基礎的検討（Ⅰ）」『論集宇津木台』第1集 宇津木台地区考古学研究会
- 黒尾和久 1995b「接合資料の検討からみた縄文中期の居住景観—埋設土器を中心に—」『シンポジウム縄文中期集  
落研究の新地平』宇津木台地区考古学研究会・縄文中期集落研究グループ
- 黒尾和久 2001「集落研究における『時』の問題—住居の重複・廃絶と同時存在住居の把握方法に関連させて—」『縄  
文集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
- 黒尾和久 2006「縄文時代の生活・居住痕跡の様相—東京都多摩丘陵地域における調査事例から—」『縄文集落を分  
析する』山梨県考古学協会
- 黒尾和久 2008a「縄文時代集落研究の近況—『新地平スタイル』の視座から—」『縄文研究の新地平（続）—竪穴住  
居・集落調査のリサーチデザイン—』六一書房
- 黒尾和久 2008b「シンポジウム発表要旨・資料集作成のコンセプト」『シンポジウム『縄文中期集落研究の新地平』  
記録集』『論集宇津木台』第2集 宇津木台地区考古学研究会
- 黒尾和久・小林謙一・中山真治 1995「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウ  
ム縄文中期集落研究の新地平 発表要旨』宇津木台地区考古学研究会・縄文中期集落研究グループ
- 黒尾和久・小林謙一 1996「住居埋設土器の接合関係からみた廃棄行為の復元—南関東縄文時代中期の事例から—」  
『日本考古学協会第62回総会研究発表要旨』日本考古学協会
- 小葉一夫 1995a「住居跡分類コード」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平 発表要旨』宇津木台地区考古学研  
究会・縄文中期集落研究グループ
- 小葉一夫 1995b「縄文中期の住居型式からみた集落変遷と領域」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平 発表  
要旨』宇津木台地区考古学研究会・縄文中期集落研究グループ
- 小葉一夫 1997「『住居型式』設定のための基礎作業—多摩丘陵・武蔵野台地の縄文時代中期炉跡の分析から—」『東  
京考古』第15号 東京考古談話会
- 小林謙一 1995「住居跡のライフサイクルと一時的集落景観の復元」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平』宇  
津木台地区考古学研究会・縄文中期集落研究グループ
- 小林謙一 1996「竪穴住居跡のライフサイクル理解のために」『異貌』15 共同体研究会
- 小林謙一 1999「縄文時代中期集落における一時的集落景観の復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82号 国立  
歴史民俗博物館
- 小林謙一 2000「大橋遺跡の一時的景観復元の検討」『セツルメント研究』第2号 セツルメント研究会
- 小林謙一 2002「一時的集落景観と廃棄活動—関東地方縄文時代中期大橋遺跡の事例より—」『セツルメント研究』第3  
号 セツルメント研究会
- 小林謙一 2003「多摩・武蔵野台地縄文中期集落の文化要素—土器群組成と炉形態の基礎的分析—」『セツルメント  
研究』第4号 セツルメント研究会
- 小林謙一 2004a「AMS炭素14年代測定法からみた新地平編年」『特集 縄文中期の集落と居住形態』『多摩のあゆみ』  
第116号 たましん地域文化財団
- 小林謙一 2004b『縄文社会研究の新視点—炭素14年代測定の利用—』六一書房
- 小林謙一 2007「AMS14C年代測定の検証と縄文住居居住期間の推定」『考古学研究』考古学研究会
- 小林謙一 2008「住居跡のライフサイクルと一時的集落景観の復元」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平』記  
録集『論集宇津木台』第2集 宇津木台地区考古学研究会
- 小林謙一 2009「14C年代測定を利用した縄文中期竪穴住居の実態の把握」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149

- 号 国立歴史民俗博物館
- 小林謙一・大野尚子 1999「目黒区大橋遺跡における一時的集落景観の復元」『セツルメント研究』第1号 セツルメント研究会
- 小林謙一・津村宏臣・坂口隆・建石徹・西本豊弘 2002「武蔵野台地東部における縄文中期集落の分布—縄文集落の生態論のための基礎的検討—」『セツルメント研究』第3号 セツルメント研究会
- 小林謙一・中山真治・黒尾和久 2004「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定（補）」『シンポジウム縄文集落研究の新地平3—勝坂から曾利へ— 発表要旨』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会
- 渋谷芳浩・黒尾和久 1987「縄文時代前期末葉の居住形態（予察）」『貝塚』39 物質文化研究会
- 縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会 1995『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平』発表要旨・資料集
- 谷口康浩 1993「縄文時代集落の領域」『季刊考古学』第44号 雄山閣
- 谷口康浩 1998「縄文時代集落論の争点」『國學院大學考古学資料館紀要』第14号 國學院大學考古学資料館
- 谷口康浩 2001「環状集落の空間構成」『縄文集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
- 谷口康浩 2002「環状集落形成論—縄文時代中期集落の分析を中心として—」『古代文化』第50巻第4号
- 谷口康浩 2003「縄文時代中期における拠点集落の分布と領域モデル」『考古学研究』第49巻第4号 考古学研究会
- 谷口康浩 2005『環状集落と縄文社会構造』学生社
- 津村宏臣 2003「遺跡間視認性の時系列動態とセツルメントパターンへの影響—武蔵野台地東部縄文中期集落の景観考古学—」『セツルメント研究』第4号 セツルメント研究会
- 津村宏臣・小林謙一・坂口隆・西本豊弘・建石徹 2002a「縄文集落の生態論（2）—遺跡分布の位相の評価とセツルメントシステムの予測—」『動物考古学』第18号 動物考古学研究会
- 津村宏臣・小林謙一・坂口隆・西本豊弘・建石徹 2002b「縄文集落の生態論（3-1）—考古学的文化要素の傾向面分析—」『動物考古学』第19号 動物考古学研究会
- 土井義夫 1985「縄文時代集落論の原則的問題—集落遺跡の2つのあり方について—」『東京考古』第3号 東京考古談話会
- 土井義夫 1995「再審請求したいのは姥山人だけではない」『論集宇津木台』第1集 宇津木台地区考古学研究会
- 土井義夫 2001「定住・移動論の評価」『縄文集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
- 土井義夫・黒尾和久 1992「縄文時代前期前葉の居住形態—多摩丘陵地域の事例を中心として—」『武蔵野の考古学 吉田格先生古希記念論文集』
- 土井義夫・黒尾和久ほか 2004「特集 縄文中期の集落と居住形態」『多摩のあゆみ』第116号 たましん地域文化財団
- 土井義夫・新藤康夫 1984「東京都における縄文時代集落の変遷」『日本考古学協会昭和59年度大会 大会資料』
- 中山真治 1992「多摩川中流域の縄文時代中期集落—主として多摩川左岸遺跡の調査の現状について—」『府中市埋蔵文化財研究紀要』第1号 府中市教育委員会
- 中山真治 1995「縄文中期土器の時期細別と集落景観」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平』資料集 宇津木台地区考古学研究会・縄文中期集落研究グループ
- 中山真治 2004「集落遺跡の二つのあり方」『特集 縄文中期の集落と居住形態』『多摩のあゆみ』第116号 たましん地域文化財団
- 中山真治 2007「縄文時代中期の小規模集落—矢川・野川上流域の中期初頭・前半集落を例に—」『セツルメント研究』第6号 セツルメント研究会
- 西田正規 1986『定住革命—遊動と定住の人類史—』新曜社
- 西田正規 2007「人類史をめざして（最終講義録）」『筑波大学先史学・考古学研究』第18号 筑波大学考古学フォーラム
- 西本豊弘・津村宏臣・小林謙一・坂口隆・建石徹 2001「縄文集落の生態論（1）」『動物考古学』第17号 動物考古学研究会
- 羽生淳子 1990「縄文時代の集落研究と狩猟・採集民研究との接点」『物質文化』53 物質文化研究会
- 羽生淳子 2000「縄文人の定住度（上）（下）」『古代文化』第52巻第2・3号 財団法人古代学協会
- 林 謙作 2004『縄紋時代史Ⅰ・Ⅱ』雄山閣
- 本橋恵美子 2005「縄文時代中期後葉の集落形態の検討—石神井川流域の住居分析から—」『土曜考古』第29号 土曜考古学研究会

---

(狛江市教育委員会, 国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)

(2010年9月27日受付, 2011年5月20日審査終了)

## **Colony Landscape on the Eastern Margin of the Musashino Daichi in the Middle Jomon Period**

USAMI Tetsuya

Concerning the major colony remains in the middle Jomon period on the eastern margin of the Musashino Daichi, the distribution of dwellings was studied for each sub-classified earthenware period. The result showed that the remains of every colony experienced times when the number of dwellings increased temporarily and presented a landscape that had dwellings distributed in a circular shape, but basically, the temporary landscape in which one to several dwellings were scattered was presented and changed with repeated increase or decrease in the number of dwellings or disappearance of dwellings midstream. For the colony remains that are regarded as large colonies or circular colonies, the landscape having dwellings distributed continuously in a circular shape cannot be reproduced. Also, in the period when the number of dwellings increased, every colony site was different, and it is presumed that the factors differ by colony site or region.

In addition, according to the study result about changes in dwelling facilities such as surrounding ditches, main post holes and hearths, no proof was obtained that one colony site was continuously operated as planned by one group from the start to the end, but rather, it is obvious that various dwelling types existed at the same time in each period. Therefore, it is presumed that one colony site may have been formed through complicated overlapping of different colony areas which must have repeatedly expanded and reduced by period.

Therefore, the difference between a large colony and a small colony is not a difference in the quality of the colony but a difference in the frequency of use as a residence. Clarification of the factors in the difference of the frequency of use by period and site leads to clarification of selection of residence, environment, means of livelihood, etc. in each period. In a sense, the study of colony remains should not be based on only discussion by binary opposition such as the conventional arguments about colony with the viewpoint on settlement or migration, but clarification of the state of settlement and the actual conditions in a certain region through the study of individual colony sites is required. To that end, efforts for the study of various archaeological elements such as the aspect of the excavated earthenware and dwelling style in parallel with the reproduction of the temporary landscape in each colony site are required to clarify the extent of settlement and its detail in each period and each region.

---

---

Key words: the middle Jomon period, eastern margin of the Musashino Daichi, colony, temporary landscape, discontinuity, settlement